

松本市里山辺

*MARUYAMA-KOFUN*

丸 山 古 墳

—緊急発掘調査報告書—

1993・3

松本市教育委員会

## 序

松本市街地の東方に位置する里山辺地区は、多くの埋蔵文化財が残されている地域として、以前から知られております。この度、都市対策砂防工事事業として藤井谷砂防ダムが丸山古墳を含む一帯で実施されることになりました。そこで、松本市が松本建設事務所より委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行うことになりました。

発掘調査は市教育委員会によって組織された調査団により、平成3年6月から9月にかけて行われました。発掘作業は酷暑に悩まされましたが、参加者の皆さまの並々ならぬご尽力により無事遂行することができました。その結果、6世紀中頃から後半に築造された積石塚古墳と副葬品の一部を確認することができました。そして、これらの成果は松本市の委託を受けた松本市教育文化振興財団によってまとめられ、この度本書が刊行されることになりました。今後、本書が郷土の歴史を解明していく史料として有効に活用されることを願っております。

なお、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存ということで遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発と、それによって失われていく歴史財産という矛盾のなかで、文化財の保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めて頂ければ、このうえなく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか発掘作業にご協力頂いた参加者の皆さま、また調査にあたりまして多大なご理解を頂いた松本建設事務所、地元関係者の皆さまに心から厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

## 例　　言

1. 本書は平成3年6月11日から9月2日にかけて行われた、松本市大字里山辺（藤井）597-3番地に所在する丸山古墳の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は平成3年度都市対策砂防工事（藤井谷砂防ダム建設事業）に伴う発掘調査であり、松本市が長野県松本建設事務所より委託を受け、松本市教育委員会が行ったものである。
3. 本書の作成は松本市より委託を受けた㈱松本市教育文化振興財團が行った。
4. 本書の執筆は、第1章：事務局を行い、その他の項目を関沢　聰が担当した。なお、地質と出土人骨について太田守夫氏と西沢寿見氏（信州大学医学部第2解剖学教室）から賜った玉稿を付章として掲載している。
5. 本文中の墳丘部を説明する方位は、石室の主軸方向を南（羨道側）－北（玄室側）と仮定した場合の東・西・南・北である。これは、石室の主軸方向が北東に振っているため、方位で墳丘の各部を説明する場合に煩雑になるため便宜的に統一したものである。同様に、石室を説明する左右表現は、羨道部から玄室の奥壁を望んだ場合の左・右である。
6. 本書作成にあたっての作業分担と協力者は次の通りである。  
遺物復原：五十嵐周子（土器）・内田和子（金属製品）  
遺物実測：竹原　学・平出貴史・吉澤克彦  
遺物トレース：久根下三枝子・竹原　学・竹原久子  
遺構図整理・一覧表作成：赤羽包子・関沢　聰  
遺構図トレース：開崎八重子・関沢　聰  
図版作成：関沢　聰・林　和子  
写真撮影：宮嶋洋一（遺物）、関沢　聰（遺構）

7. 本書作成にあたり、二木直人氏より大正9（1920）年の発掘に関するご教示のほか、資料借用等について多大なご協力を頂いた。
8. 本調査に関する出土遺物及び測量・実測図類は松本市教育委員会が保管している。

# 目 次

序  
例言  
目次

## 第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過.....	3
第2節 調査体制.....	3

## 第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境.....	4
第2節 歴史的環境.....	5
第3節 調査研究史.....	6

## 第3章 調査結果

第1節 調査の方法.....	9
第2節 調査前の状況	
1. 立地.....	10
2. 調査前の状況.....	11
第3節 遺構	
1. 墳丘.....	12
2. 埋葬施設	
(1)横穴式石室.....	13
(2)骨蔵器埋納施設.....	15

## 第4節 遺物

1. 発掘調査の出土遺物	
(1)土器.....	16
(2)鉄製品.....	18
(3)装身具.....	18
(4)その他の遺物.....	18
2. 二木直人氏所蔵の遺物	
(1)土器.....	19
(2)鉄製品.....	21
(3)装身具.....	21

## 第4章 調査のまとめ.....

23

## 付 章

第1節 丸山古墳周辺の地形と地質.....	26
第2節 丸山古墳出土の人骨.....	28

## 図 目 次

第1図 遺跡の位置	30
第2図 調査範囲	31
第3図 周辺遺跡	32
第4図 地形測量図	33
第5図 天井石測量図	35
第6図 調査区全体図	36
第7図 墳丘測量図	37
第8図 墳丘断面図	39
第9図 横穴式石室測量図(1)	40
第10図 横穴式石室測量図(2)	41
第11図 土器(1)	42
第12図 土器(2)	43
第13図 土器(3)	44
第14図 鉄製品・装身具・その他の遺物	45

## 挿 図 目 次

挿図 1 基本土層	4
挿図 2 宮坂光次「信州松本地方の古墳」の挿図	8

## 表 目 次

丸山古墳出土装身具一覧表（二木直人氏所蔵分）	22
------------------------	----

# 第1章 調査経過

## 第1節 調査に至る経過

丸山古墳は大正9（1920）年に発見されて以来、その存在は地元の人々や研究者の知るところとなり、現在は周知の遺跡として松本市の遺跡台帳・地図に登録されている。この丸山古墳が都市対策砂防工事事業として建設予定の藤井谷砂防ダムの上方に位置することから、将来的には土砂の中に古墳が埋没してしまう恐れが生じた。そこで、松本市教育委員会は松本建設事務所と埋蔵文化財の保護協議を重ねてきた。協議の結果、松本市教育委員会は平成3・4年度に丸山古墳の発掘調査を実施し、記録保存を行うことにした。年度別の内訳は、平成3年度が現場調査と整理作業、平成4年度が整理作業と報告書の刊行である。

発掘調査にかかる文書記録は以下の通りである。

平成3年4月15日 埋蔵文化財発掘調査の通知提出。

6月1日 平成3年度埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。

9月11日 丸山古墳発掘調査終了届提出。

埋蔵文化財拾得届及び同保管証提出。

10月28日 丸山古墳出土埋蔵物の文化財認定通知。

## 第2節 調査体制

平成3年度（発掘調査）

調査团长：松村好雄（教育長） 調査担当者：関沢聰・木下守・伊丹早苗（社会教育課）

指導者：西沢寿晃

発掘参加者：青木雅志、赤羽章、赤羽包子、赤羽貞人、石合英子、久根下三枝子、奥喜義、奥定夫、小島茂富、佐々木保二、高橋登喜雄、武田陸恵、中村安雄、牧久雄、堀國成、横山真理

事務局：荒井寛（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、熊谷康治（課係長）、直井雅尚（主事）、  
関沢聰（主事）、木下守（主事）、竹内靖長（主事）、久保田剛（事務員）、荒井由美（嘱託）、山岸弥生（嘱託）

平成4年度（報告書作成）

事務局：島村昌代（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、窪田雅之（主任）

松本市教育文化振興財團事務局：深沢豊（事務局長）、牟禮弘（局次長）、青木孝文（次長補佐）

松本市立考古博物館：神澤昌二郎（館長）、直井雅尚（主任）、関沢聰（主任）、久保田剛（主事）、  
荒井由美（嘱託）、藤原美智子（嘱託）

## 第2章 遺跡の環境

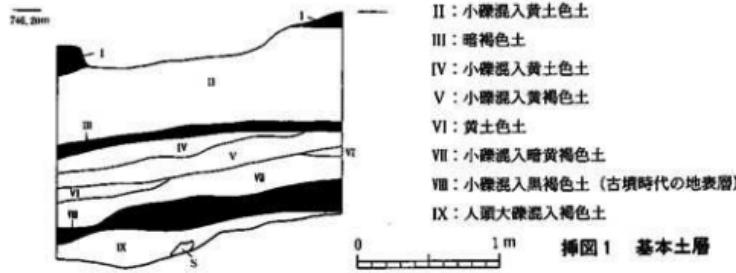
### 第1節 地理的環境

#### 1. 古墳の位置（第1・2図）

丸山古墳は美ヶ原温泉から藤井沢を上流へ750m程遡ったところに位置している。市道沿いに藤井集落、松本市水道局藤井配水池・旧松本射撃場を抜けると、道路はふたてに分かれる。左が美鉛湖に至る市道2220号線、右が淡池へ抜ける市道2704号線である。丸山古墳はこの市道の分岐点から市道2220号線を35m程登ったところの東側に位置している。なお、藤井谷砂防ダムは市道の分岐点をまたぐ形で造られるため、今回の調査時点では、既にこの分岐点から約25mにわたって市道2220号線は削平されていた。そのため、市道2704号線から丸山古墳北側を迂回して市道2220号線へ接続する臨時の仮設道路が造られていた。なお、丸山古墳は移築されて既に現位置にはない。砂防ダム完成後においては、最上部に位置する堤壠西端の裏側約15mの地点が丸山古墳が所在した位置となる。

#### 2. 基本土層

本墳は崖縦地形に立地していたため、主として西側山腹斜面からの土砂の流出により埋没していた。調査地の南西隅の地点で確認できた基本土層は下図（挿図1）の通りである。土層は大きく2種類に分けられる。I・III・VII層は暗褐色または黒褐色を呈し、植物の腐植による暗色系の土層であることから比較的安定した時期の土層と推定される。また、II・IV・VI層は黄土色土で、山側からの土砂の崩落があった時期の土層と推定される。このうち古墳時代の地表面に相当するのはVII層である。VII層は約10~25cmの厚さで調査区全体で確認することができ、現在の斜面と同様の傾斜方向で堆積している。古墳時代以降に土砂が堆積した深さ（現地表からVII層上面までの深さ）は調査区の東西方向で0.8~1.2m、南北方向で0.8~1.65mを計る。重機による堆積土の除去はVII層までを行い、VII層上面を検出面とした。墳丘外の北・東側では1mを越える巨石を含む大形石がVII層中に含まれていた。これらは墳丘よりも高位に位置するものもあり、古墳の墳丘を構成した積み石ではなく斜面上方から落ちてきたものと考えられる。



## 第2節 歴史的環境

丸山古墳が所在する里山辺地区には多くの埋蔵文化財が分布している。本地区的遺跡については別書で時期別に詳述している<sup>(1)</sup>ので、ここでは古墳時代を中心に集落遺跡と古墳<sup>(2)</sup>に分けて述べることにする（第3図）。

**【集落遺跡】** 里山辺地区は松本平に弥生文化が最初に波及した頃の針塚遺跡がある。弥生時代以前、本地区は水稻耕作を中心とした集落が展開していったものと推定されるが、その実態は不明なところが多い。なお、現在までのところ県町遺跡（後期末4軒）、鎌田遺跡（後期後半2軒）、堀の内遺跡（後期10軒）で弥生時代後期の集落が確認されている。

古墳時代の集落遺跡は、薄川左岸では千鹿頭北遺跡（前期7軒、後期40軒）があるが、遺跡周辺では中期の遺物も出土している。右岸では堀の内遺跡（前期17軒・中期4軒・後期4軒）、鎌田遺跡（中期2軒）、県町遺跡（中期末～後期初頭4軒）がある。なお、堀の内遺跡からは前期と推定される方形周溝墓が1基見つかっている。下原遺跡では山辺中学校敷地内の調査（1984～1992）で後期の住居址19軒と建物址12棟が確認されている。これらのうち千鹿頭北・堀の内遺跡は古墳時代を通して継続した集落の可能性がある。この他に各地で遺物散布地が確認されている。しかし、古墳被葬者の生前の集落を推定したり、古墳時代を通しての山辺地区の開発を語るにはまだ不明なところが多い。

**【古 墳】** 里山辺地区では、現在までに19基の古墳が確認されている。これらは薄川の両岸縁辺部と山麓部に立地して築造されている。

薄川左岸縁辺部では巾上古墳と南方古墳がある。いずれも横穴式石室をもつ後期古墳である。特に、南方古墳からは金銅装の圭頭太刀、銅碗・承盤、鉄製童顛等の特殊な副葬品が出土している。山麓部では御符古墳があり、直刀・劍が出土していることから中期後半～後期初頭に築造されたと考えられよう。

薄川の右岸縁辺部では、薄町～荒町にかけて分布する積石塚古墳群がある。このうち針塚古墳は5世紀後半に築造された円墳で、竪穴式石槨に内向八花文鏡（舶載鏡）・鉄斧・鐵鎌等が副葬されていた。大塚古墳・古宮古墳は出土遺物から後期古墳と考えられるが、埋葬施設や墳丘規模については不明である。また、隣接する石上遺跡からは後期古墳の周溝部分が検出されているが、積石塚古墳であったのかは不明である。山麓部では湯川に合流する小河川毎に数基単位で後期古墳が分布している。追倉沢川では左岸に上金井古墳、右岸に人穴1号・2号古墳がある。藤井沢では、右岸に山田入古墳、丸山古墳、藤井1号・2号古墳がある。また、山の上沢川ではやや離れるものの御母家古墳がある。これらは内容が不明な山田入古墳を除けば、いずれも山腹斜面に立地し、横穴式石室をもつ小規模な後期古墳である。これらのうち人穴1号・2号古墳・山田入・丸山古墳は海拔高740m以上の高所に位置し、追倉沢川と藤井沢が形成する扇状地形の扇頂部に立地する点で共通

している。また、この両河川では、距離をおいた下流に1、2基の古墳（上金井古墳、藤井1号・2号古墳）が築造されている点も共通している。

上記のように、本地区では5世紀後半から古墳の築造が展開するが、その多くは未調査で内容が不明なものが多い。今後は個々の集落遺跡・古墳の実態を解明しながら、総合的に古墳時代の里山辺地区を評価していくことが課題である。

#### 註

- (1) 松本市教育委員会 「松本市針塚遺跡II」 1993
- (2) 里山辺地区的古墳の名称は、小字や通称を使用した古墳名と、里山辺1～17号古墳までの通番を使用した古墳名の2通りがある。本書では前者に統一して記述しているが、第3図の地名表では両者を併記しておいた。

### 第3節 調査研究史

丸山古墳は大正9（1920）年に故・二木諫藏氏によって発掘されている。当時の発掘状況に関しては以下の4つの資料がある。

資料1 宮坂光次「信州松本地方の古墳」 『人類学雑誌』第37巻第5号 1922年5月

発掘から2年後の大正11（1922）年3月に筆者は現地で古墳を実見し、二木氏から発掘所見を聴取して紹介している。丸山古墳に関する部分を論文から抜粋する。

信州松本地方の古墳 宮坂 光次

人類學教室選科學生甲野勇君から、信州松本地方にケールンがあるといふことを聞いて居ったので、三月下旬同地方を二日許り歩いて其の二三を見ることが出来た。

私の見たのは松本平東北の一隅であって、東筑摩郡里山邊村及松本市の一部である。松本市以東里山邊村の山麓に至る、薄、女鳥羽両河の中間地帯は、大體に於て東北の山麓地方と両河の洪積層の地帯とに分けることが出来古墳も亦此の二つの區域によって、多少其の種類を異にする様である。

#### （一）山麓地方の古墳

東筑摩郡里山邊村字丸山の古墳

山邊温泉より七八町上った谷の中に在って、十間餘を距てゝ溪流に臨んだ急傾斜の地に在る。發掘されたのは大正九年秋であって、桑畠の北の一隅が少しく高くなつて居たのを地平しする為め壊した時、石櫛の天井石が現はれ、始めて古墳と氣付いたのであって、全く口碑傳説等がなかった相である。

又石櫛の發掘後直ちに埋められて了つたので、天井石（八枚）より外は見ることが出来ないが石櫛としては比較的規模が小さい様に思ふ。地主二木諫藏氏の發掘談によるに、「石櫛は奥行約二間半、幅四尺、高さ五尺位の大きさであつて、下には平石を敷き、其上に河原石、更に炭を敷き、入

口（西南方）に頭を向けて、人骨一體（頭蓋、頸骨、四肢骨等あり、比較的小）あり、頭部には朱が散在して居た。」

副葬品としては、祝部、彌生式土器、直刀一箇、管玉・糸玉各数箇、曲玉一箇、御吹玉、金環銀環等を出して居る。其外、方一寸程の朱にまみれた布片が存在した相であるが、松本市警察署で散乱して了った由である。

此の古墳は全く壊されて原形を失ってはいたが、其の遺物、存在地の狭小なる地形等より、小さな圓形古墳であったものと想像される。（以下略）

#### 資料2 大正11（1922）年12月27日付東京帝室博物館の資料寄贈に対する感謝状及び別紙目録

丸山山古墳から出土した遺物の大半は、二木諫藏氏から東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）へ寄贈されており、博物館総長三宅米吉の感謝状と目録が交付されている。この感謝状と目録を諫藏氏の甥にあたる二木直人氏が保管されており、寄贈された出土品の内容を知ることができる（第11図版参照）。感謝状で「平瓶残缺 陶製壹個以下式拾七點」と表記されている寄贈資料の別紙目録の内訳は以下の通りである。なお、原文の用語と寸・分・厘の長さの単位は、現代の考古学用語とcm単位に変えて記述している。

平瓶1点（須恵器・口頸部破損・径14.2cm）、滑石製勾玉1点（長3.3cm）、碧玉製管玉9点（完形8点・長1.6cm、2.5cm、2.3cm、2.1cm、2.4cm、2.6cm、2.3cm、3.0cm・破損品1点・長2.1cm）、滑石製管玉1点（長1.0cm）、切子玉6点（完形5点・長3.3cm、2.2cm、2.2cm、2.1cm、1.6cm・破損品1点・長2.2cm）、ガラス製小玉24点、滑石製小玉1点、銀環2点（銅製・鍍銀、長径2.7cmが2点）、銅環4点（環径2.1cmが4点、相連接していた）、銅釧2点（径7.1cmが1点、他に3片に破損した1個体）、鐵鐵一括（平根鐵・茎部なし・先端破損）、鐵器（残片）

#### 資料3 古墳の天井石の上に建てられた石碑の碑文（第3章第2節、第3図版参照）

表面：「丸山大神」

裏面：「古墳改祀 大正九年十一月発見 二木諫藏建之」

なお、これに関連して、東京国立博物館作成の地名表<sup>(1)</sup>の「事由」欄に、「1920（大正9）年11月20日二木諫藏」の記載があり、発掘が実施された日が推定できる。

#### 資料4 今回の調査で出土した青磁製骨蔵器の裏蓋に記載された「大正十年五月三日改葬」の墨書き

上記の資料と二木直人氏を含む地元の人達からの聞き取り調査・今回の発掘成果を踏まえて、若干の推測を交えながら当時の状況をまとめてみよう。

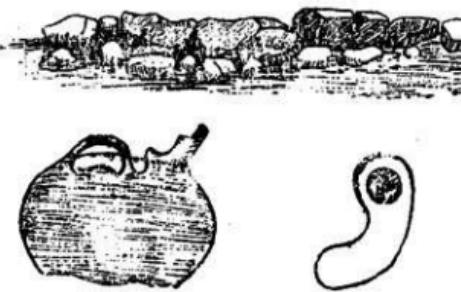
大正9（1920）年11月20日に、故・二木諫藏氏は桑畠の改修の際に、横穴式石室の天井石を発見した。そして、天井石を除去して石室内部を掘り下げていき、床面付近で副葬品を発見したものと考えられる。その後、出土遺物は松本警察署へ提出された。翌大正10（1921）年5月3日には、二木氏は出土した人骨を青磁の藏骨器に納めて改葬している。そして、改葬後は墓所を区画するための石垣が造られ、石室の両側にはイチイが植樹されている。さらに天井石を利用して「丸山大神」の石碑が建てられ、古墳の被葬者の靈は現在に至るまで祭られている。

なお、資料1には宮坂光次のスケッチと考えられる石室の天井石と平瓶・勾玉の挿図（挿図2）がある。この図から、大正11（1922）年3月の時点では、石碑はまだ建てられておらず、出土品もいったんは二木家に返却されていたものと考えられる。そして、当時は地方政府を通して古墳の出土遺物は宮内省に報告されていたので、丸山古墳の出土品も同様の経過を経た後、東京帝室博物館に寄贈されるに至ったものと推定される。

宮坂光次の論文で紹介された以降、本墳は研究者の知るところとなった。しかし、その後は本墳が研究の対象になったことはなく、いくつかの古墳地名表<sup>(1)</sup>の中で取り上げられてきたにすぎない。そして、大正年間の発掘から70余年の歳月を経て、丸山古墳は再び発掘調査が行われることになったのである。

#### 註

- (1) 木村 豪章 「古墳時代の基礎的研究第一資料編（II）」『東京国立博物館紀要 第26号』 1991
- (2) 信濃史料刊行会 「信濃史料 第一巻上」 1956  
本郷村教育委員会 「信濃浅間古墳」 1966
- 東筑摩郡・松本市・塙尻市資料編纂会 「東筑摩郡・松本市・塙尻市誌 第二巻 歴史上」 1973  
長野県史刊行会 「長野県史 考古資料編 全1巻（1） 遺跡地名表」 1981



物遺及墳占山九字村邊山里都摩筑東 圖一第

挿図2 宮坂光次「信州松本地方の古墳」の挿図（『人類学雑誌』第37巻第5号 1922）

## 第3章 調査結果

### 第1節 調査の方法

#### 1. 調査の方針

丸山古墳の大正9（1920）年の発掘内容は、前章で述べたように宮坂光次の論文中で紹介されている。この論文と東京帝室博物館へ寄贈された平瓶の存在から、調査前の時点では本墳は7世紀代の後期古墳であり、おそらくは地面を掘り込んで横穴式石室を構築し、僅かな盛土を施しただけの終末期古墳の可能性が高いと推定された。そこで、現地調査にあたって発掘の方法（と目的）を以下の5つに設定した。

- 1) 現況の地形測量の実施（古墳の地理的環境の確認）
- 2) トレンチ調査と土層図の作成（墳丘構造、石室構築用の掘り方の確認）
- 3) 横穴式石室の測量（石室構造の確認）
- 4) 石室内覆土の水洗選別法による遺物採取（副葬品の内訳の確認）
- 5) 丸山古墳に隣接する山田入古墳の所在確認調査

なお、4)については、前回の発掘で既に副葬品の取り上げが行われているため、遺物の出土はあまり期待できず、石室構造の把握に主眼を置くことになった。なお、二木謙蔵氏が大正10（1921）年に出土人骨を骨蔵器に入れて改葬していることから、その回収も目的のひとつとなった。

#### 2. 発掘経過

##### 1) 現況の地形測量

最初に、古墳周辺の除草と雑木の伐採をした後に、現地形の平板測量を実施した。その後、露出していた天井石を測量した。この天井石は大正年間の発掘と改葬で確実に動かされているが、石の配列順序がある程度反映されている可能性もあるので参考までに測量を実施したものである。

##### 2) 横穴式石室の調査

天井石を除去した後に横穴式石室の掘り下げを開始した。まず、石室構造を確認するためキ字状に土手を残しながら掘り下げを行った。その後、石室の側壁が確認されたため、それを手がかりに掘り下げを続行した。石室内には大正10（1921）年の改葬時に投棄された大量の疊が混入していたが、これらを除去しながら床面付近で二木謙蔵氏が埋納した骨蔵器を検出している。さらに、投棄された疊がなくなり、攪乱された床面が検出・精査できた段階で石室の測量を実施した。なお、石室内の覆土はすべて水洗選別法を実施し、ガラス製小玉と鉄錐各2点を採取している。

##### 3) トレンチの調査

石室の調査に平行して、墳丘の盛土・石室の掘り方を確認するためにトレンチ調査を実施した。

トレンチは天井石の主軸方向に1本と、それに直行する2本を設定して、土層観察を行なながら徐々に掘り下げた。また、墳丘構造を確認するためのサブトレンチを随時設定している。本墳は墳丘の東半部が大きく破壊されていたが、墳丘の北側（特に石室の奥壁付近）の残存度は良好であった。そこで、この部分のトレンチを拡張したところ、石室の側壁から外側斜面に向かって大形礫が墳丘状に続くことが判明した（第4図版参照）。当初、これらは石室の裏込め石と解釈して、礫がなくなる部分で掘り方がトレンチの土層断面に現れるものと想定していた。しかし、石積みが側壁から2m以上も続くこと、裏込め石にしては大きな礫が存在することから、これらは墳丘を構成する積み石の可能性があると考えるに至った。そこで、トレンチの土層および地形の観察所見を検討した結果、本墳は地面を掘り込んで石室を構築した古墳ではなく、崖錐地形に立地しているため土砂で埋没した積石塚古墳であることが推定された。

#### 4) 調査方法の変更と墳丘調査

本墳はかなりの土砂によって埋没していることが予想されたため、調査には建設用重機を使用することにした。そこで、基本土層の確認と掘り下げ面を確定するために、古墳の西側で深掘りを行った。その結果、墳丘の端部を一部破壊してしまったものの、古墳時代の旧地表面に相当する黒褐色土層を確認することができた。そこで、重機を使用して本層までの土砂の除去を行った。

なお、ダムの堰堤工事によって崖状に削平された古墳の南西側は、安全面の確保のため重機による掘り下げは実施できなかった。また、二木直人氏の要望で調査後に本墳の石室とイチイの木は別所に移転されることになっているため、全面的な掘り下げは実施できず、墳丘南半部に未調査区を残すことになった。

重機による掘り下げ後は、墳丘の積み石の露出作業を行った。この段階で、土師器・須恵器の破片が出土したので、地点測量後に取り上げている。その後は墳丘平面図の作成・等高線測量を実施し、最後にトレンチの土層図を作成して丸山古墳の発掘調査は終了した。

#### 5) 山田入古墳の確認調査

松本市の遺跡台帳では丸山古墳に近接して山田入古墳の存在が記されている。この古墳はかつて天井石と推定される大礫が露出していたとされるが、その実態は不明である。地元の方たちに所在を確認しても、正確な場所は特定できなかった。そこで、丸山古墳周辺の踏査を実施したが、天井石を見つけることはできなかった。最終的には、山田入古墳があったとされる丸山古墳の東側（市道の仮設道路部分）を重機で掘削して天井石の有無を確認することにした。掘削は最深1.5mまで及んだが、天井石等はなんら認められず、山田入古墳の所在地を確認することはできなかった。

### 第2節 調査前の状況

#### 1. 立地（第2図）

丸山古墳は藤井沢が流れる藤井谷の西側斜面に位置する。藤井沢からの水平直線距離は約60mで

ある。古墳の西側は北北西（高）－南南東（低）に急傾斜する山麓斜面がせまっている。本墳はこの急斜面の傾斜角度がゆるやかに変換する地点に立地している。古墳が所在する標高は海拔高745m前後である。また、本墳の東北東には2つの市道に挟まれて北北東（高）－南南西（低）の傾斜をもつ山麓斜面が伸びてきている。そのため、本墳は2つの山麓と藤井沢に挟まれたごく狭い斜面上に立地するが、特に東側の山麓急斜面の影響を受けているため北西（高）－南東（低）の傾斜角度は13°を有する。なお、本墳の西北西80mには松本城の石垣用の石材を切り出したとされる崖状地形がある。その下側の等高線が外に膨らんでいることから過去に土砂の崩落があったことがうかがえる。これらのことから本墳は、崩落等による土砂の堆積の進行が早い崖鑿性の斜面に立地していると推定される。この立地が大正9（1920）年当時に「桑畠の北の一隅が少しく高くなつて居った」程度まで本墳の墳丘を埋没させた要因であると考えられる。

## 2. 調査前の状況（第4図）

本墳は市道2220号の東脇3.8mにある。この市道は山麓斜面を切り通しただけの未舗装路で、道路建設時に出た土は幅2～3m、高さ0.6～0.8m程で道路の東側に沿って積まれている。

調査前の本墳は天井石6枚が露出しているだけであった。そして、下から2枚目の天井石には石碑が建てられていた。この碑は天井石の1枚を転用したもので、縦書きで表面に「丸山大神」、裏面に「古墳改祀 大正九年十一月発見 二木説藏建之」と刻まれている。また、天井石の両側には改葬を記念して植樹されたイチイの木と2枚の大石を組み合わせた石造物が建てられていた。また、天井石の東側に長さ5.1mの石垣、北側に長さ2.5mの石垣が造られている。この石垣は古墳を墓所として区画するために二木氏によって造られたものである。なお、東側石垣に直行して斜面下側に旧桑畠の境界を示す段差が認められた（第2・3図版）。

古墳の範囲については 地形測量で確認することはできず、市道と石垣に囲まれた狭い部分が推定できるにすぎない。この範囲の標高は744.2～746.0mの範囲にある。なお、744.4～744.8mの等高線は天井石の下側でわずかに膨らんでいるが、これは墳丘ではなく、前回の発掘や石垣の築造によってできたものと推定される。

### 第3節 遺構

#### 1. 墳丘（第7・8図）

本墳の東側と墳頂部は耕作や発掘・石垣等によって、大きく改変されていた。しかし、東側の墳丘最下部の大半は削平を免れて残存しており、古墳の平面形や規模を確認することができた。

本墳は円墳で、東側縁辺部が僅かに失われていた。規模は石室の主軸方向で9.14m、直交方向で残存長9.80mを計る。僅かに東西に長い円形を呈するが、石室入口付近の西側墳端は直線的に伸びており、完全な円形にはならない。本来の墳丘の高さは不明であるが、現存していた石室最奥部の天井石の上端を起点とすると、墳丘の西側で比高差0.67m、東側で同2.46m、南側（狭道部入口）で同1.71m、北側で同0.70mを計り、標高は742.6m～745.4mの範囲にある。

以下では、2本のトレンチの土層に関する所見に基づいて、墳丘構造について述べることにする（第8図 A-A'・B-B'）。

本墳は古墳時代の旧地表面と考えられる黒褐色土（基本土層のⅦ層）上面に構築されている。周溝などの外部施設は認められず、地表に直接土混じりの礫（石）を積み上げている。このため、純粹に礫だけで構成される積石塚古墳ではなく、土石混合墳に分類されよう。トレンチの土層観察によると、墳丘は東西方向（B-B'）では暗～黒褐色土混入の礫層で構成されるが、北側トレンチ（A-A'）ではこの上層に黄土色土混入の礫層が観察される。この黄土色土混入礫層は石室の北側から墳丘北東部にかけて面的に捉えることができた。このことから、墳丘の造成は少なくとも2段階の工程で行われたと考えることができる。なお、墳丘の土層はさらに分層できる可能性もあるが、礫が圧倒的に多い土層のため2層しか確認することができなかった。

墳丘下の黒褐色土層は、東西方向では土層上面が自然な傾斜を呈するのに対して、南北方向では北側の黒褐色土の傾斜と石室床面下のそれとは連続しない。後者については石室部分を構築する際に地表面の削平が行われたためと考えられる。

墳裾については残存状況が良好な墳丘西側の所見に基づいて述べる。ここでは大形礫を墳端に配置せずに、中・小形礫だけを円弧状に配置している。しかし、墳丘内部では下層ほど大きな礫が使用されていた。

墳丘上面は、石室から約1.3～1.5m離れた部分に40～60cm前後の大形礫が弧状に巡らされている。これらは天井石よりも1段低い高さで、平坦な面を描えるように配置されている。この石組の内側には拳大～20cm前後の小形礫が集中しており、石室の裏込め石と推定される。しかし、墳丘東側が破壊されているため、この石組が石室外側を円形に巡るものなのか、単に石室の裏込めを区画するための長辺円形に巡るもののかは特定できなかった。

墳丘の南半は植樹のための未調査地と石垣による破壊のため不明な点が多い。しかし、石室入口の西側ではわずかに墳端を捉えることができた。この部分では、墳端を構成する石積みのすぐ外側

で墳丘を礫と共に構成する暗褐色土とVII層（旧地表面の直上に堆積した土層）との境界を面的に捉えることができた（第8図版）。調査範囲が狭小なため断定はできないが、この部分では礫よりも土を主体にして墳丘が造られている。このことから、斜面下側に位置する墳丘南部では盛土して整地をした後に積み石を行うか、または土を主体にした礫混合土で墳丘下部を構築した可能性が高い。

## 2. 墓葬施設

### （1）横穴式石室（第9・10図）

石室は前回の発掘によって、天井石は動かされ、さらに側壁上部と床面に擾乱を受けていた。また、石室内部には大正10（1921）年の改葬時に投棄された大量の礫と、ブロック状に混じり合う黄土色土と暗褐色土が認められた。

天井部の構造については、宮坂光次が本墳を実見した際に8枚の天井石があったと報告している。今回の調査前には、石碑に使用された天井石も含めて7枚の天井石が確認されていた。その後のトレンチ調査で、天井石北側の石垣最下部できらにもう1枚の天井石が確認されたため、天井石は8枚になり先の記述に符合する。なお、石垣の南端に145×65cmの大形礫が認められた（第4図）。この石は天井石にふさわしい大きさなので、本来は9枚（以上）の天井石があった可能性も考えられる。なお、最奥部の下にあった天井石は、左右の側壁と奥壁最上部に直接乗っていたことから原位置を保っている可能性が高い。この天井石の大きさは（幅）112×（長）36×（厚）10cmと比較的小さい。他の天井石は最大が162×75×35cm、最小が141×50×26cmの大きさで、全体的には幅108～162cm、長50～99cm、厚さ24～39cmの範囲内にある。

石室の構造については無袖型横穴式石室に分類される。全長6.15m、主軸方向はN-29°05'10"-Eである。玄室と羨道は樋石によって区画されている。

玄室は全長4.53m、平面形は奥壁に向かって徐々に幅広になり、奥壁部分で最大幅1.29m、玄室入口部分で最小幅1.07mを計り、長方形に近い逆台形を呈する。奥壁は高さ1.63mを計り、左右の側壁の間に大形礫を2個並置して、その上に中・小形礫を5、6段積み上げている。また、最上部では小石をかませて高さを揃えた上で天井石を乗せている。礫の積み方は乱雑で規則的なものではない。また、礫の間は隙間がかなりあり、奥壁に関しては礫と土を併用しながら構築したものと考えられる。

側壁は両側とも下段に大形礫を配置して、その上に中形礫を数段積み上げている。下段はほぼ垂直であるが、それより上はわずかに持ち送りされている。

山側の左側壁は石室築造時の状況をかなり良く残している。側壁の高さは奥壁から玄室中央までは1.55～1.72mとほぼ同じ高さで続き、中央から玄室入口にかけては徐々に高さを減じ、樋石の部分で壁高0.96mを計る。側壁の積み方は、下段に大形礫を8個並べて、その上に中形礫を積み上げている。下段の大形礫は長27～75cm、高さ56～89cm、中形礫は長25～50cm、高さ10～30cmの範囲にある。礫の積み上げは玄室の入口から半分程は4～5段、それより奥は5～7段である。また、積

み方は規則的ではないものの、石室内部に平坦な面を向けるとともに、小石をかませて段の高さが水平に近くなるよう配慮していることがうかがえる。なお、玄室中央から奥にかけては、山側からの土圧により側壁が石室内側へ迫り出してきており、割石間の隙間が大きくなっている（第10図C-C'、D-D'間の左側壁参照）。

右側壁は上部が破壊されており、壁高は奥壁部分で1.64mを計るもの、入口に向けて徐々に幅を減じ框石の部分で66cmを計る。側壁の積み方は下段に9個の大形礫を並べ、その上に左側壁同様に中形礫を積み上げている。礫の積み上げは玄室の入口から半分程は3~4段、それより奥は5~6段が認められる。積み方は左側壁と同様であるが、土圧による迫り出しがない分、割石間の隙間は密である。

玄室は前回の発掘による擾乱で床面の凹凸が激しく、築造時の状況を残している部分はほとんどなかった。しかし、奥壁付近と、中央やや南寄りで厚さ2、3cmの板石がまとまって敷かれている部分があり、当時の石室床面と推定した。なお、板石は石室内覆土の礫群中に混在していることから、前回の発掘でほとんどの板石は取り上げられたものと推定される。

板石の下部については、奥壁付近では古墳築造時の地表面と推定される黒褐色土が認められたのに対し、奥壁の約60cmから手前は黒褐色土の上に黄灰色粘土ブロック混入黄土色土が貼床されていた。これは傾斜地に石室を構築しなければならないため、斜面下側の入口側に貼床を施して平坦な床面を造ったものと考えられる。そのため、貼床の厚さは奥壁よりでは2、3cmであるが、しだいに厚くなり框石の部分では12cmに及んでいる。なお、框石から玄室側約50cmにかけてはこの貼床中に中形礫が埋められていた。これらは貼床上面ではほとんど認められなかつたので、貼床をする際に土といっしょに入れられたものと考えられる。また、框石から50cm奥よりの主軸上には黒褐色土上面に礫（36×28×18cm）が置かれ、貼床面より8cm程高く出ており特異であった。

なお、宮坂論文に掲載された発掘所見では、床面について「（略）下には平石を敷き、其上に河原石、更に炭を敷き、入口（西南方）に頭を向けて、人骨一體（頭蓋、頸骨、四肢骨等あり、比較的小）あり、頭部には朱が散在して居た」と述べられている。この記述から今回確認された板石は宮坂論文の「平石」に相当するものと考えられる。なお、発掘所見に河原石と炭敷きの存在が記述されている点と、出土人骨に各1体分の生骨と火焼骨がある（付章参照）ことから、本来は2回目の追葬面があったことが推定される。なお、石室内覆土からは礫に混じって少量の炭化材が出土しており、先の「更に炭を敷き」の記述を裏付けるが、「河原石」に相当するものは確認することができなかつた。

框石は99×29cmを計り、貼床上面から約18cmの高さを有している。框石の部分から羨道部にかけては、大形礫を下段に用いた側壁は認められず、中形礫と小石だけで側壁は造られている。

羨道部は長さ1.62mで、幅は框石の部分で最大幅1.10mを計る。羨道部入口は長さ70~76cmの3枚の大形礫で構成される。このうち中央の礫は上面が平で、左右の礫が挟み込むようにして中央礫

の端部に乗っている。この左右の疊に挟まれた部分だけを羨道部の入口とすると幅37cmとなりやや狭い。床面は貼床されているが、玄室の床面よりも2、3cm程高い。床面には板石は敷かれず、中少疊が認められた。しかし、疊の高さが不揃いなため、遺構に本来伴う疊なのかは特定できなかった。なお、羨道部の両側と南側は調査できなかったため、前庭部の存在については確認できなかった。

閉塞施設は框石を中心に羨道部から玄室の一部かけての2.23×1.07mの範囲で、閉塞石が積まれていた（第6図版）。この部分は15~40cm前後の中・小形疊が密集しており、大正年間の改葬時に投棄された疊群が土混じりで隙間が認められるのと異なり、明瞭に識別することができた。このことから、前回の発掘では天井石を除去した後に玄室だけを掘り下げて床面に到達したものと考えられる。これに関しては宮坂論文の発掘所見に「石櫛は奥行約二間半」(4.55m)とあり、玄室の長さ4.53mと符合する点で裏付けられる。

なお、古墳に使用された石材は、天井石と壁石が角閃玢岩がほとんどで、疊岩が一部で使用されている。床面の板石も角閃玢岩で、1点のみ砂岩が使用されていた。

## (2) 骨蔵器埋納施設

大正10（1921）年5月3日に、二木藏蔵氏が本墳出土の人骨を改葬した際に埋納した骨蔵器が、玄室の奥壁から1.7m入口側のところで見つかっている（第5図版）。骨蔵器の安置にあたっては、石室床面（発掘によって若干擾乱された石室床面）上に厚さ1~2.5cmの平石を敷いて台とし、さらに25~45cm前後の疊を四角に囲って、その中に青磁製骨蔵器と白磁製猪口2点を安置している。さらに、疊の上に52×39×6cmの比較的偏平な割石をかぶせて蓋をしている。なお、東側の疊上には2枚の板石を敷いて、蓋石をかぶせるための高さ調節を施している。そして、この埋納施設の周囲1.0×1.3mを中形疊で囲んで、蓋石が隠れるほど玉砂利を積み上げていた。なお、蓋石の下には小疊混入暗褐色土が充満していたが、この土が人為的に入れられたものかどうか判断できなかった。

埋納施設に使用された石材は古墳の床面の板石と側壁または墳丘の構築材と考えられるが、玉砂利については硅岩・安山岩・石英閃綠岩の円疊で薄川から採取して運ばれてきた可能性が高い（太田守夫氏のご教示による）。なお、この玉砂利は宮坂論文中の「河原石」に相当するのか、二木氏が運んできたものなのかは不明である。

骨蔵器は青磁製の蓋と壺からなる（第5図版）。蓋は直径13.7cm、器高2.0cmで、裏面に「大正十年 五月三日 改葬」の墨書がある。壺は口径13.3cm、底径10.8cm、器高13.2cmで、中には人骨と歯が入れられていた。なお、人骨の一部には赤色顔料が付着しているものが認められた（人骨と歯については付章参照）。また、猪口は白磁製で、口径5.5cm、底径2.6cm、器高4.0cmで同形のものが2個体ある。

これらについては、人骨の鑑定終了後に二木直人氏に返却され、現在は移転された石室内に再び安置されている。

## 第4節 遺物

丸山古墳は既掘されているため、今回の調査で出土した遺物はごくわずかである。本墳に伴う遺物の大半は大正11（1922）年に東京帝室博物館（現・東京国立博物館）に寄贈され、現在に至っている。しかし、その際に寄贈されなかった出土品の一部が、本墳を管理されてきた二木直人氏によって保管されている。そこで、本節では今回の発掘調査の出土遺物に加えて、二木直人氏所蔵資料を併せて報告することにした。なお、遺物は断片的な小破片が多いが、副葬品の内訳を知る上で欠くことのできないものなので、資料整理にあたっては可能な限り遺物の図化・提示を試みている。

### 1. 発掘調査の出土遺物

今回の調査で出土した遺物はごく少量である。原位置で出土したと考えられる資料は1点もないが、副葬品の構成を窺うことができる。以下では、種類別に記述していく。

#### (1) 土器（第11・12図）

土器は墳丘の東半部と南西部から出土している（出土地点は第7図参照）。前者から比較的多く出土しているが、これは烟の開墾と石垣の造成時に遺物が移動したものと推定される。土師器と須恵器があるが、全形を復原できるものは1点だけである。その他は断片的な資料ばかりである。

##### ①種別・器種

###### ア. 土師器

杯・高杯が25点出土しているが、図化提示できるのは1点だけである。なお、土師器の体部内面は黒色処理が施されるものと、されないものの2者が認められる。

杯（1）閉塞部から出土している。底部がヘラケズリされた丸底で体部はゆるやかに内湾しながら口縁部に至るが、口縁端部はわずかに反っている。内面は下半部が板状工具によるナデ調整が施されている。さらに、口縁部の一部を除いて黒色処理が施されている。胎土は最大10mmの疊が観察される。推定口径11.0cm、器高6.5cmである。

###### イ. 須恵器

杯・高杯・壺・提瓶・横瓶・瓶類・短頸壺・甕がある。

杯（2）墳丘東部から1点出土している。2は杯の下半部で、外面に回転ヘラケズリとロクロナデ、内面にはロクロナデの調整が施されている。

高杯（3・4）3点出土し、2点を図化している。3は墳丘東部から出土したもので、無蓋高杯の杯部である。破損部のところで、わずかに「く」字状に屈曲している。4は水洗選別で見つかった長脚2段高杯の脚部である。「ハ」字状に開き、2方向の長方形の透かし窓をもつと推定される。他に石垣東側斜面から無蓋高杯の杯部破片が出土しているが、小破片で図化できなかった。同一個体または同器形と考えられるものが二木氏所蔵遺物（32）にある。

壺（5・6）墳丘西側から2点出土している。5は口径9.8cmを計る口頸部で、シャープな突出

する稜をもって外反している。口縁端部は水平につまみだされて、幅6mmの平坦面が認められる。破損部付近で2条の沈線が観察される。6は体部で、最大径(9.5cm)が約1/2前後に位置し、口頭部の基部は細い。体部中央は2本の沈線で区画され、その中は櫛状工具で斜位の列点文が施されている。そして、これらの施文後に、突出する注口部が貼り付けで作られている。注口は上外方から下内方へ向けて穿孔されている。底部は回転ヘラケズリが施されている。

**横瓶(10・11)** 2点を拓影・図化しているが、同一個体の可能性が高い。いずれも墳丘の東側から出土している。体部の破片で、外面は平行タタキが施された後、部分的にカキ目が行われている。内面は円弧または同心円状の当て具痕がナデにより半ばすり消されている。同一個体と考えられるものが二木氏所蔵遺物(38・39)にある。

**瓶頸(7)** 2点出土している。7は墳丘東部から出土したものである。瓶頸の底部としたが、杯蓋の天井部、または提瓶の体部の可能性もある。底部外面は回転ヘラケズリ、体部の内外面はロクロナデが施されている。さらに、底部外面の中央はナデ調整で平坦面が形成され、3本の沈線からなるヘラ記号が観察される。他に図化していないが、小形の提瓶の体部の破片1点が、石垣東側の斜面から出土している。カキ目調整が施され、中央に認められる2条の沈線はヘラ記号の可能性がある。

**短頸壺(8)** 石室東側の石垣周辺で1点が採集されている。8は石垣周辺で採集されたもので、小形の短頸壺の体部と推定される。ソロバン玉状の器形を有し、最大径(10.0cm)の直上部分に1条の沈線が巡らされている。さらに、その上下には櫛状工具で列点文が斜位に巡らされている。器面調整は内外面ともロクロナデである。上側の破損部付近に重ね焼きの痕跡が観察されることから、有蓋短頸壺の可能性がある。

**甕(9・12~18)** 破片のみで70点が出土し、8点を図化している。9は墳丘南西部で出土した口頭部である。口径19.8cmを計り、外反する比較的短い口頭部は、端部が折り曲げて肥厚されている。この肥厚部と頭部には、それぞれ1条の凹線が巡らされている。これ以外に石垣の東側斜面で2点の口縁部(同一個体と考えられる)が採集されている。肥厚された口縁部には1条の凹線が巡らされている。また、口縁端部は幅4mmの平坦面を有している。これらは小破片のため図化していないが、同一個体と考えられるものが二木氏所蔵遺物(41)にある。12~18は甕の体部~底部の破片である。このうち、12~16は墳丘の北~東部で採集され、17・18は閉塞部から出土している。外面はいずれも平行タタキが認められるが、その後にカキメ調整が施される12・13・15、櫛状工具で難な器面調整を施す14、叩いた後の器面調整を施さない16~18がある。内面は、明瞭な円弧または同心円状の当て具痕を残す12~14・16、当て具痕がナデ調整で半ばすり消されている15、丁寧なナデ調整により当て具痕が完全に消されている17・18がある。これらのうち12・13は同一個体と考えられる。なお、17は二木氏所蔵の壺破片と接合したもので、体部には3条の沈線が観察され、螺旋状に巡らされている可能性が高い。

## ②出土土器の時期

上述してきた土器群はすべて古墳時代後期に属するものである。これらは小破片が多いが、古墳の時期（築造一追葬期間）を決定をするための基準資料となる。そこで、編年研究が進んでいる須恵器を中心に丸山古墳の時期を考えたい。なお、土師器については中信地方では該期の類例が少ないと認められることは控え、今後の調査例の増加に期待したい。4は長脚2段高杯の長方形の透かし部分で、TK-10～TK-209型式の間に位置づけることができ、6世紀中頃から後半と考えられる。また、10・11の横瓶の存在も6世紀代で捉えることができよう。一方、6の甌は口頭部の基部が細く、突出する注口部を貼り付けて作られている点で、やや後出する要素が見られる。おそらくは7世紀代に属すると考えられる。

以上の点から、今回の調査で出土した土器は6～7世紀代の大きな時間幅の中で捉えられる。これは、本墳の築造・初葬から追葬に至るまで長期にわたって古墳が利用されたことに起因すると考えられよう。

### 参考文献

- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群I』 平安学園考古学クラブ  
1981 『須恵器大成』 角川書店

## (2) 鉄製品（第14図）

鎌が3点出土している。いずれも小破片で、全形を窺うことはできない。文中の寸法は現存値である。

19は骨蔵器を囲む石組内の覆土から出土したもので、鎌身部の先端である。断面は片丸を呈し、長1.9×幅1.0×厚0.3cmを計る。他に石室内覆土の水洗選別の結果、鎌の対被部または茎部と考えられる破片2点が見つかっている。20が長2.9×幅0.7×厚0.5cm、21が長2.2×幅0.7×厚0.5cmを計る。

## (3) 装身具（第14図）

石室内的覆土を水洗選別した結果、ガラス製小玉を2点得ている。22は青色を呈し、ガラス内部には気泡が散在している。直径3.9mm、厚さ2.5mm、孔径1.2mm、重量0.06gを計る。23は青緑色を呈し、直径3.0mm、厚さ2.1mm、孔径0.9mm、重量0.03gを計る。

## (4) その他の遺物（第14図）

石室内的覆土の水洗選別に伴って縄文時代の遺物が出土している。24・25は凹基有茎錐で、いずれも黒曜石製である。24は長(2.69)×幅(1.71)×厚0.36cm、重量1.40gで、茎部と片脚が破損している。25は長(2.05)×幅(1.44)×厚0.39cm、重量0.95gで、先端・茎部・片脚が破損している。26は粘板岩製の打製石斧である。撥形・円刃を呈する完形品で、長10.01×幅5.12×厚1.99cm、重量

141.30 g を計る。他に黒曜石の原石（重量53.90 g）と剝片（重量2.80 g）が出土している。このうち、凹基有茎鉢については縄文時代後・晩期～弥生時代にかけて見られるもので、該期の遺跡が付近に所在する可能性が考えられる。

## 2. 二木直人氏所蔵の遺物

二木直人氏が所蔵されている資料は、大正9（1920）年の発掘の際に出土した遺物である。内訳は土器・鉄製品（鐵）・各種装身具である。このうち後2者は遺存状況が良く、横穴式石室内から出土した副葬品と考えられる。しかし、土器については復原可能なものが少なく、小破片が多いことから、発掘の出土品以外に開墾や石垣の造成等に際して採集されたものが含まれていると考えられる。

### （1）土器（第12・13図）

土師器・須恵器の破片約150点が2箱に分けて納められている。このうち土師器の杯・須恵器の蓋杯・甕・提瓶で破片接合ができたものもあるが、全形を伺えるものはわずかしかない。

#### ①種別・器種

##### ア. 土師器

杯・高杯が13点あるが、図化することができたのは杯の一部だけである。

杯（27～29） 3点を掲載している。いずれも体部の途中から外反する口縁をもつ器形で、内面に黒色処理、内・外面ともミガキによる器面調整が施されている。また、外反する部分の内面には稜が認められる。27・28はヘラケズリを施された丸底気味の底部から体部の約 $\frac{1}{3}$ にかけてはゆるやかに外離し、そこから上方は内窩気味に外反している。なお、底部はヘラケズリの後に、体部と同様にミガキが施されている。27は口径14.1cm、器高4.6cmを計る。29は体部の外面に段をもつ有稜杯である。段は器高の $\frac{1}{3}$ 以下に位置すると推定され、段から上方の外反する部分は27・28よりも長めである。外面の段はヘラケズリによって作り出されている。内面は横方向のミガキが施されているが、内稜の下方は特に入念なミガキが行われている。口径14.2cmを計り、27とほぼ同径である。

##### イ. 須恵器

蓋杯・高杯・提瓶・横瓶・甕類・甕がある。

蓋杯（30・31） 2点ある。30は杯身である。同一個体と考えられる2片からなる。口径12.2cm、受け部径14.2cm、たちあがり高1.5cm、器高4.2cmを計る。底部には回転ヘラケズリ、体部の内・外面にはロクロナデ調整が施されている。31は蓋で、小破片からの推定ではあるが口径14cm前後を計る。口縁端部は短く屈曲している。また、端部から1.0cm内側の内面が剥落していることから、この部分に返りがあったものと推定される。

高杯（32～34） 3点ある。32は無蓋高杯の杯部である。口径19.2cmを計る。外面には1条の突出する稜をもち、ゆるやかに外窩するが、口縁端部でさらにわずかに外開する。33は小形の無蓋高杯

の杯部で、口径10.8cmと推定される。杯部中位の外面に1条の突出する棱をもつ点は32と同じであるが、口縁部は外湾しながら直立気味に立ち上がる。また、口縁端部の内側は短く外反するため、鈍い棱が認められる。34は長方形の透かし窓をもつ長脚2段高杯の脚部である。透かし窓の間には2条の沈線が巡らされている。32・34は同一個体の可能性が高い。

**提瓶（35）** 2点あり、うち1点を図化している。35は比較的小形の提瓶である。口頭部～体部にかけての部分で、推定される体部の径は9cm前後である。肩部には把手の接合痕がある。輪状または鍵状把手の区別は不明であるが、小形化している点から鍵状把手の可能性が高いと考える。体部外面はカキメ調整が施されているが、焼成時の降灰による自然釉が全面に観察される。内面は粗いロクロナデが施されている。他に、別個体の体部破片がある。外面はカキメ、内面はロクロナデ調整が施されており、内面中央部で被蓋部の接合痕が明瞭に観察される。

**横瓶（38・39）** 2点を拓影・図化しているが、同一個体の可能性が高い。いずれも体部の破片で、外面は平行タタキが施された後、部分的にカキ目が行われている。発掘調査で出土した10・11と同一個体と考えられる。

**瓶類（36・37）** 2点を図化掲載している。これらは平瓶・横瓶等の可能性をもつが、器種の特定はできなかった。36は外反する口頭部で、端部は丸く仕上げられている。推定口径6.8cmを計る。平瓶または横瓶と考えられるが、壺の口縁部の可能性もある。37は提瓶・横瓶またはフラスコ形瓶の体部と考えられる同一個体3片を拓影図化している。外面にはカキメ調整が施され、さらに沈線が巡らされている。また、内面にはナデ調整が施されている。

**甕（40～45）** 96点あり、6点を図化している。40は比較的大形の甕の口頭部で、口径23.8cmを計る。口縁端部の外面は2段に肥厚され、その直下に櫛状工具による波状文と2条の浅い凹線が施されている。内面はロクロナデ調整が施されている。41は口頭部で、推定される口径は20cm前後である。口縁端部は肥厚され1条の凹線が巡らされている。また、口縁端部は幅4mmの平坦面を有している。42は2片からなる口頭部で、推定される口径は20cm前後である。41と同様の肥厚部には2条の浅い沈線と頭部に1条の沈線が巡らされている。43は体部、44・45は底部の破片である。外面はいずれも平行タタキが認められるが、その後にカキメ調整が施される43、その後の器面調整を施さない44・45がある。内面は同心円状の当て具痕を残す43、当て具痕がナデ調整により消されている44・45がある。

## ②所蔵土器の時期

発掘調査の出土土器と同様、須恵器を中心に考えることにする。30は蓋杯の杯身である。受け部からのたちあがりは端部が丸く仕上げられているが、それほど内傾せずに1.5cmの高さを有する。このことから、TK-10型式に併行し、6世紀中頃と考えられる。一方、31は内面にかえりがつくと推定される蓋で、7世紀代に属すると考えられる。特に、口径が14cmと比較的大きい点と、端部の屈曲が認められる点から、7世紀後半まで下る可能性がある。32は無蓋高杯の杯部、34は長脚2

段高杯の脚部である。MT-85、TK-43、TK-209型式に類似するので、6世紀中頃～後半に位置づけられよう。また、35の提瓶、38・39の横瓶も6世紀代に位置づけられる。特に35は小型化し、鍵状把手を有する点で、6世紀代の中でも後出する要素が見られる。これらの点から、丸山古墳は6世紀中頃から7世紀代にかけての土器群を有しており、古墳の築造から追葬の期間を反映していると考えることができる。

### (2) 鉄製品（第14図）

鉄が5点ある。46は鎌身部の破片である。柳葉形を呈し、断面は片丸で、逆刺をもつ。残存長は4.0cm、鎌身部は長3.4×幅1.1×厚0.4cmを計る。47は柳葉形を呈する。銹化が進んでいるため、鎌身部の縁辺は剥落し、逆刺の有無は不明であるが、46と同形の鉄と推定される。範被部は湾曲し、途中から破損している。残存長7.6cm、鎌身部は長3.4×幅1.0cm、範被部が最大幅0.7cmを計るが、銹化による剝離のため、厚さは不明である。48は両端が破損しているが、範被部～茎部が残存している。棘笠被で、茎部には木質部が残存している。残存長7.0cmで、範被部は長5.2×幅0.6×厚0.3cm、茎部は長1.8×幅0.5×厚0.3cmである。49は大形の平根鎌で、鎌身部～範被部にかけての部分で、両端は破損している。鎌身部は断面がわずかな片丸で、下端はごく浅い逆刺をもち、長軸と逆刺のなす角度は直角に近い。残存長5.7cmで、鎌身部は長4.4×幅2.4×厚0.3cm、範被部は長1.4×幅0.9×厚0.4cmである。なお、鎌身部の表面には赤色顔料が付着している。50は関範被をもつ範被部～茎部で、両端が破損している。残存長4.6cm、範被部は長1.9×幅1.1×厚0.4cm、茎部は長2.7×幅0.6×厚0.2cmを計る。以上のことから、本墳には細身で柳葉形の鎌身部と棘笠被もつ46～48（・19）と、幅広の関範被をもつ49・50の2種類（以上）の鉄が副葬されていたことが窺える。

### (3) 装身具（第14図）

耳環・管玉・切子玉・小玉（ガラス製・滑石製）類が総計20点あり、いずれも完形品である。寸法・重量・材質等を次頁の一覧表に登載しているので参照されたい。

耳環（51） わずかに縁背が認められる銀環である。完形で鍍銀されているため、芯材の構造は不明である。長径（最大横幅）が2.72cmあり、帝室博物館の資料目録の「銀環 銅製、鍍銀、長径九分」に対応する。なお、目録内容から2点が既出しているので、本例で3点目となり、銀環は2組（以上）副葬されていたことになる。

管玉（52～58） 7点が出土している。52・53が滑石製のほかは、すべて碧玉製である。52～55は太身の一群で、52・53は黒色、54・55は深緑色を呈する。56～58は細身で、56・57が緑色、58が淡緑色を呈する。穿孔方法は56が両面穿孔のほかは、すべて片面穿孔である。

切子玉（59・60） 水晶製で、2点が出土している。60は比較的透明度が高い石材が使用されている。穿孔方法はいずれも片面穿孔で、孔内には赤色顔料の付着が認められる。

ガラス製小玉 (61~68) 8点が出土しているが、色調・大きさから4種類に区分される。61は青色を呈する大形品で、明瞭な気泡筋が認められる。62~64は青色を呈す小形品である。このうち63はガラス内部に気泡が散在しているのが認められる。今回の発掘で出土した22はこれらに属する。65・66は透明度の強い青緑色呈し、ガラス内部には比較的大きな気泡と気泡列が認められる。長径5mm前後で、本墳出土の小形品の中では比較的大きい。67・68はやや不透明な淡緑色を呈し、両端が平坦なためにわずかながら稜をもつものである。

滑石製小玉 (69・70) 黒色を呈し、大小2点が出土している。

丸山古墳出土装身具一覧表（二木直人氏所蔵分）

単位:mm, g

No	器種	色調	最大長 最大径	最大幅	最大厚	現重量	孔径	材質	備考
51	耳環		27.2	24.5	6.5	14.9		銀・銅	
52	管玉	黒色	29.6	9.6		4.9	3.0	滑石	片面穿孔
53	"	"	21.0	7.8		2.3	2.8	"	"
54	"	深緑色	23.6	10.0		4.6	3.4	碧玉	"
55	"	"	22.5	8.9		3.5	3.9	"	"
56	"	緑色	22.3	5.8		1.1	3.5	"	両面穿孔
57	"	"	19.5	7.0		1.7	2.5	"	片面穿孔
58	"	淡緑色	15.7	6.2		0.9	2.0	"	"
59	切子玉		16.0	28.0		9.5	3.2	水晶	"
60	"		9.5	22.5		2.7	3.0	"	"
61	小玉	青色	7.3		6.3	0.45	1.2	ガラス	気泡筋
62	"	"	3.7		2.5	0.07	1.0	"	
63	"	"	3.5		2.2	0.06	1.3	"	気泡散在
64	"	"	2.5		2.5	0.04	0.9	"	
65	"	青緑色	5.0		2.7	0.13	1.6	"	気泡列
66	"	"	4.7		3.6	0.17	1.0	"	"
67	"	淡緑色	3.5		3.3	0.09	0.7	"	気泡筋・気泡列
68	"	"	3.7		3.0	0.08	0.7	"	気泡筋
69	"	黒色	7.5		5.7	0.39	1.2	滑石	
70	"	"	4.5		3.4	0.10	0.7	"	

## 第4章 調査のまとめ

丸山古墳は大正9（1920）年に二木謙藏氏によって発掘されて以降、松本市の東山部に点在する小規模古墳として知られてきた。そして、71年後に再び松本市教育委員会によって調査されることになった。前回および今回の発掘調査を通して知ることのできた、本墳の概要は以下の通りである。

墳 形：円墳（積石塚古墳） 規模：9.80×9.14m

埋葬施設：無袖型横穴式石室 全長6.15m 主軸方向：N-29°05'10"-E

玄 室 長さ：4.53m 幅：1.07～1.29m 高さ：1.63m

羨道部 長さ：1.62m 幅：0.37～1.10m 高さ：0.96m

特 微 玄室と羨道部の境界に樋石が置かれている。

出土遺物：土師器（杯・高杯）、須恵器（杯・高杯・瑟・提瓶・横瓶・平瓶<sub>(1)</sub>・瓶類・短頸壺・甕）

武器（鉄刀<sub>(2)</sub>・鉄鎌）、装身具（耳環・勾玉・管玉・切子玉・小玉・銅鏡<sub>(3)</sub>）

人骨・歯（生骨・火焼骨が各1個体）

築造時期：6世紀中頃～後半

備 考：本墳は崖錐地形に立地するため、土砂の堆積により墳丘は埋没していた。

1920年の発掘所見と人骨の鑑定所見から、少なくとも1回の追葬が考えられる。

文 獻：官坂光次「信州松本地方の古墳」『人類学雑誌』第37巻第5号 1922

以下、本章では今回の発掘成果と課題・問題点を挙げてまとめとしたい。

### 1. 古墳の年代—築造と追葬—について

丸山古墳の年代については、出土遺物の検討から導くしかない。一般的には副葬された土器の年代観に基づいて、古墳の時期は推定される。本墳には土師器と須恵器が副葬されていた。しかし、前者は松本平では集落・古墳とも該期の類例が乏しく、比較・検討の対象となり得ない。そこで、編年研究の進んでいる須恵器から、丸山古墳の年代を検討した。詳細については、前章（第4節）で述べているので重複は避けるが、本墳では6世紀中頃から7世紀代にかけての須恵器が混在していた。この点については、追葬の際に副葬された土器の混在として解釈できよう。なお、2回の発掘で出土した土器は破片が大半で、出土位置が全く不明な点と器種別の点数を明らかにできなかつた点は残念である。

本墳の築造年代（=初葬年代）は、6世紀中頃～後半にかけてと推定される。この時期の須恵器としては、蓋杯の杯（30）・長脚二段高杯（34）がある。また、鍵状把手をもつと推定される小形の提瓶（35）もこの時期に属する可能性がある。これらは田辺昭三氏の須恵器の編年<sub>(4)</sub>からすれば、II期後半に位置づけられよう。特に、蓋杯の杯については、たちあがりの内傾の度合と長さか

らTK-10型式に併行する可能性があり、この一群の中でも特に古い様相をもつものである。完形品が1点もないという資料的な制約を斟酌すれば6世紀中頃～後半に築造年代を推定することが妥当であろう。なお、土器以外の遺物の中では、滑石製の管玉・小玉、銅鏡がこの時期に伴う可能性がある。

次に、追葬について検討してみる。丸山古墳を発掘した二木諫藏氏の所見では、古墳の床構造は「平石を敷き、其上に河原石、更に炭を敷き（略）」とある。また、骨蔵器内の人骨の鑑定所見では、生骨と火焼骨の各1体が確認されている（付章参照）。この2点から、本墳は築造直後の初葬のほかに、もう1回の追葬が行われた可能性が高い。この場合、炭敷きの面が追葬時の床面と推定されよう。2種の人骨の前後関係については確認するすべはないが、火焼骨が追葬に伴うものと考えたい。初葬時の床面は前回の発掘による擾乱のため、「平石」の面か「河原石」の面かを今回の調査で特定することはできなかった。

この追葬に伴う土器としては、甕（5・6）、蓋杯の蓋（31）がある。特に、後者については内面にかえりがついていた可能性がある。いずれも7世紀代に属すると考えられるが、断片的な資料であるためより細かい時期の推定は困難である。なお、東京帝室博物館へ寄贈された平瓶も追葬に伴う副葬品と考えられる。

最後に、追葬の回数について検討を加えておきたい。丸山古墳から出土した耳環は銀環3個と銅環4個の計7個である。<sup>(5)</sup> このことから耳環はすくなくとも4対はあったことが推定される。イヤリングとしての耳環は1対で機能を果たすので、このことから4体（以上）の人間が葬られていた可能性を考えることはできる。しかし、人骨の鑑定所見から判断すれば、本墳では初葬と追葬1回が行われた可能性が高く、1体の埋葬で複数の耳環が副葬されたと考えるのが妥当であろう。

## 2. 積石塚古墳について

丸山古墳は後期の小規模古墳であるとともに、墳丘構造から積石塚古墳であることが判明した。松本平の積石塚古墳については、女鳥羽川右岸に展開する水汲古墳群と薄川右岸の荒町から薄町にかけて展開する古墳群の2つの古墳群が知られている。両古墳群は河川の縁辺部に5、6基が分布し、連続して築造された古墳群の可能性が高い。これに対して丸山古墳は藤井沢が形成する小規模扇状地の扇頂部に位置し、従来の松本平の積石塚古墳とは立地を大きく異にしている。

なお、長野県内の積石塚古墳の性格については、渡来系氏族の築造によるもので、被葬者の生産基盤については馬匹生産が考えられている。<sup>(6)</sup> しかし、丸山古墳からはあきらかに馬具と考えられるものは出土していない。また、古墳の所在地周辺は、かつて松本城の石垣用に石材が切り出されたように、容易に石室・墳丘構築用の礫を獲得しやすい地域にあることも注目しなければいけない。積石塚古墳の築造を「環境自生説」で捉える立場もあるが、この観点からいえば、本墳と立地を同じくする人穴第1・2号古墳等の墳丘構造が鍵を握っている。しかし、里山辺の東山麓に展開する古墳群は正式な調査が及んでいないため不明な点が多い。今後はこれらの古墳の実態の解明―特

に、墳丘構造の確認一が問題解決の糸口になると考えられる。本古墳の性格を積石塚古墳の観点から追求することには限界があるので、以下では周辺古墳群のあり方から検討してみることにする。

### 3. 丸山古墳の性格について

里山辺地区には弥生時代～古墳時代前期の集落遺跡が点在するので、この時期には既に水稻耕作を主体とする開発は行われていたと考えられる。しかし、古墳の築造は5世紀後半の針塚古墳が初現である。これ以降、薄川右岸の縁辺で積石塚古墳の築造が展開する。一方、現在までに薄川左岸縁辺や山麓部の古墳群で中期にまでさかのぼるものはなく、すべて後期古墳と考えられている。特に、古墳の副葬品が判明している巾上古墳・南方古墳は7世紀代の後期古墳である。断片的な資料からの推定ではあるが、古代の里山辺地区の開発は、薄川右岸では5世紀以降に古墳被葬者の指導による開発が行われだし、薄川の左岸および山麓部の開発は1段階遅れて始まったと考えられる。特に、薄川右岸の山麓部では古墳の分布（第2章第2節参照）から追倉沢川・藤井沢・山の上沢川の3本の小河川毎に異なる集団が開発（谷水田の開発等が考えられる）にあたったと考えたい。そうであるならば、各集団の指導者的人物が、各河川が形成した小規模扇状地の扇頂部付近を奥津城にして古墳に葬られた可能性も十分に考えられるのではないだろうか。

里山辺地区的古墳群については、薄川右岸縁辺の積石塚古墳群と他の古墳群との関係、古墳時代後期の集落遺跡の確認、生産基盤の解明を明らかにしないと、歴史叙述を展開することは難しい。この点で、今回の発掘は山麓部の小規模古墳の資料提示と問題提起ができた点で意義があったといえよう。

### 4. 結語

6・7世紀にわたる築造一追葬を経て、1400年近くも眠りについていた丸山古墳の被葬者は、20世紀に入ってから発掘によって2度も眠りを妨げられた。現在、彼らは別所に移築された石室の中で再び永い眠りについている。埋蔵文化財の保護に従事する担当者の責務として、彼らを歴史の中に位置づけていくことが今後の課題であると考えている。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行までの間、二木直人氏をはじめとする地元関係者、松本建設事務所の方々から多大なるご理解、ご協力を賜りました。記して感謝の意を申し上げますとともに、埋蔵文化財の保護に対してより一層のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

#### 註

1. 平瓶は今回の発掘調査では出土していないが、大正11(1922)年に東京帝室博物館へ寄贈された資料目録に「平瓶残缺 陶製、口部缺失アリ径四寸七分 叠蓋」とある。
2. 鋼刀は宮坂光次の『信州松本地方の古墳』のなかで、「副葬品としては、(中略)、直刀一箇、(以下略)」とある。
3. 銅劍は今回の発掘調査では出土していないが、東京帝室博物館へ寄贈された資料目録に「劍 銅製徑式寸參分五厘 叠蓋」と「銅殘缺 銅劍三片ニ折レタリ 叠蓋」とある。
4. 田辺 昭三 1981 「須恵器大成」 角川书店
5. 二木直人氏所蔵の銀環1個以外は、当時の東京帝室博物館へ寄贈されている(現・東京国立博物館所蔵)。
6. 桐原 健 1989 「積石塚と渡来人」 東京大学出版会

# 付 章

## 第1節 丸山古墳周辺の地形と地質

太田 守夫

### 1. 位置と地形

本遺跡は松本市大字里山辺藤井の藤井沢の谷の中にある。藤井沢は渋池方向から西流し、途中石切場の谷を南に向かう小流を合わせ、さらに南西へ流れて藤井集落に達している。延長1.5km程の小流であるが、平地への出口に傾斜のやや急な、南西向きの小扇状地を形成している。古墳はこの扇状地の扇頂をわずか登った、上述の合流点の右岸に位置している。

この扇状地は東側の入山辺の追倉沢・海岸寺沢による、桐原の小扇状地と同じもので、薄川扇状地の北側の山脚を南東～北西に走る断層帯へ、北側の山地から流れ込んだ急流により形成されたものである。藤井集落を扇端とし、扇頂～扇端間500m、扇頂の幅50m、扇端の幅450m、平均傾斜7°のやや急な勾配の扇状地である。

本遺跡付近は合流点のため、谷幅75mと広がり、谷傾斜は7.6°と増加する。また、西側の山地の斜面傾斜は30°を超え、一部に急崖をつくっている。

本遺跡周辺の山地の地質は、第3紀層（内村累層）堆積岩の砂岩・泥岩互層と、これに貫入した火成岩の玢岩からなっている。砂岩・泥岩互層は軟らかで崩壊しやすく、古墳周辺に崖錐性の堆積を広げている。玢岩は合流点周辺の山脚に分布し、古墳の北50mの石切場では、砂岩・泥岩互層に貫入した、厚さ10mを超える岩床状のものがみられる。この玢岩は山辺石とも呼ばれ、松本城の石垣に多数利用されているもので、角閃石の斑晶を多くもち、青色～青灰色を呈している。古墳を築造している石材も、ほとんどこの岩石である。

### 2. 古墳と周辺の堆積層

古墳の位置する合流点では、すでに砂防ダムの堰堤工事が始まり、付近の地形を大きく変えている。特に合流点の堆積層の中央（古墳から10数m下方）に堰堤の基礎が完成したため、流れや堆積物の状態の把握が難しくなっている。このような状態の中から判断して、合流点の地形はおよそ左岸・右岸、二つの流れに挟まれた突出部からなっていると考えられる。これらの地形の背後は、いずれも玢岩と砂岩・泥岩互層の山地で、突出部はその延長である。左岸・右岸では崖錐性の小地形が形成され、さらに左岸には沢の下刻に伴う小段丘もみられる。流れは現在、崖錐面・段丘面を浸食し、谷のほぼ中央を急流となり、扇状地へ下っている。

古墳ののる崖錐面は最も発達がよく、石切場を下る小流の右岸に続くため、末端を除くほかは、本流の浸食から守られた形跡がみられる。古墳はこの崖錐面の上方部に位置し、向きは南面（石室

の主軸方向はN.29°E) している。

崖錐性堆積物は、砂岩・泥岩の崩壊した土・砂・礫からなるが、一般に成層の不明瞭な堆積である。ただこの中で、上記の土・砂・礫に炭化物を混じえた、厚さ50cmの黒食土層が最も連続性を保っている。この土層は崖錐の発達過程に置ける一層で、その上・下部に上記の土・砂・礫の堆積がみられる。

崖錐面の広さは、すでに工事により破壊されているが、縦延長30m、横延長20m程と推定され、桑畠などに利用されてきている。

古墳はこの黒色土層を割って造成されたものと考えられ、石室入口の土層断面でそれがみられる。黒色土層の上部層(50cm前後)は、覆土とその後の崖錐の移動性によるもので、耕土となつたため擾乱されている。また、層内に湧水があることがあるが、これは崖錐性堆積層内の伏流水とみられる。

次に、古墳の立地と関係をもつ合流点からの展望は、山かけにかかる古墳の位置を除き良好である。特に突出部がすぐれている。なぜこのような山かけの場所が選ばれたか、疑問視されるところであるが、現在の地形からみると、古墳の右岸の崖錐性地形が発達もよく、最も安定しているのに対し、突出部の基盤は玢岩の岩塊であること、左岸は本流の浸食を受けやすい場所であることが推測される。

### 3. 古墳に利用されている岩石

古墳を造成している岩石は、すべて周辺の山地に産するものである。

石室の側壁、天井石はすべて玢岩であり、底部の敷石は不定型の玢岩と板状の砂岩が並べられている。墳丘の積み石は玢岩を利用し、覆土(盛土)には砂岩・砂質泥岩とその風化堆積物、わずかの玢岩の破片がみられる。

また、石室内の底部に、石英閃綠岩や安山岩の円礫(径4cm前後)が散乱していたが、これは二木謙蔵氏が骨蔵器を安置する際に使用したもので、他所から運び入れたものである。

## 第2節 丸山古墳出土の人骨

信州大学医学部第2解剖学教室

西沢 寿晃

人骨は玄室内に埋納された骨蔵器の中に収容されていたものである。すべてが骨片状となり、量的にも多くない。ただし、部位が判明する大形の破片が多く残り、骨質も良好である。微細な骨片はわずかで、改葬の際の選択的な意図によるものか、単に残存の程度を示すものかは不明である。

人骨の性状からみて、①土中での自然の腐朽により残された生骨、②火熱を受けた焼骨に類別できる。このうち焼骨の破片が多い。

以下、残存骨の部位と形状についての概要を記す。

### ①生骨

骨の表面はいずれも粗糙となり、風化により崩壊した断端などはかなり脆くなっている。

頭蓋骨：後頭骨—内後頭隆起の右部分、ラムダ縫合から離脱している。骨壁は厚く玩丈である。下顎骨—下顎骨体のオトガイ棘を含む小部分、棘は通常の程度であり、歯槽の形状は不明である。その他、頭蓋冠の小片が2片ほど残る。

歯 一般的に腐朽・消失する出土人骨中、高度のCa分よりなる歯のエナメル質部分のみが保存に堪えるのが通例である。ただし、火熱を受けた歯は容易に崩壊する。本資料の場合も、生骨に伴うとみられる歯の保存度が比較的良好である。しかし、歯冠と歯根を残す完存例はわずかで、多くが歯根を欠失するか、歯冠内に象牙質を残す程度である。

残存する歯	4	6		4	5	6	7	(左右不明)
	4	5		7				他に歯種不明2本

咬耗の状態—歯冠の形態を残すもの多くは大・小白歯である。いずれも各咬頭の先端で咬耗が進行し、象牙質が点状に露出している例が多い。エナメル質での咬耗局面が結合して平滑となる程度から、より強く陥凹面を形成する歯種もある。一方で小白歯の一部で、ほとんど咬耗痕の認められない例も見られる。咬耗度の分類は全体的にみてBrocaの2度・中等度といえよう。

大腿骨—右、骨体中央部分(約20cm)。黄褐色を呈し、骨表面は粗糙であるが、骨質は堅い。緻密質は厚く玩丈である。粗線の発達はやや強く、ピラスチルの形成が弱度に現れている。左、骨体中央部分(約12cm)管状で残る。上・下端は横折状であるが、左・右は同一個体と見なされる。その他、大腿骨・脛骨の破片が少量残存している。

### ②焼骨

火焼を受けた部位や、温度差により、黒色に炭化したり、部分的に白色や灰色に変色した細片な

ど、色調の傾向は異なる。しかし、形状は一様に湾曲、変形し、細かな亀裂が生じている。大形の長骨片もすべて縦割などに破碎されている。骨の表面は滑沢で硬い骨質に変化して焼骨特有の性状を示している。

頭蓋骨：頭頂骨、前頭骨に接する部位で3点が接合される。冠状・矢状縫合が離脱している。骨壁は比較的厚い。焼骨の歯としては切歯・大臼歯など2、3本がいずれも破損して残る。弱度の加熱により茶褐色に変色している。咬頭に咬耗痕が認められる。他に頭蓋冠の板状片が数点残る。

椎骨—胸椎の椎弓の小片、1個。

鎖骨—右、肩峰端寄り $\frac{1}{2}$ が残るが、関節部を欠く。円錐靭帯結節、菱形靭帯線ともに弱度で、形態も細くきゃしゃである。

寛骨—左、大坐骨切痕を含む小部分で、切痕は深く鋭い。

橈骨—右？、骨体中央部分（約5cm）。

大腿骨—骨体の中央部分（各10cm、9.5cm、7.5cm）が残る。殿筋粗面はやや発達し、骨壁は厚い。

脛骨—骨体の中央部分2片（約7.5cm）、左右かと見られる。管状を保つ骨壁は厚く頑丈で、髓腔に焼土が充填している。

ベンガラの付着した骨—赤色のベンガラがかなり鮮明に付着した骨片が2片認められる。いずれも大腿骨の骨体部分（6.7cm、4.5cm）で骨表面は茶褐色に焦げていて、管腔内は黒色化している。

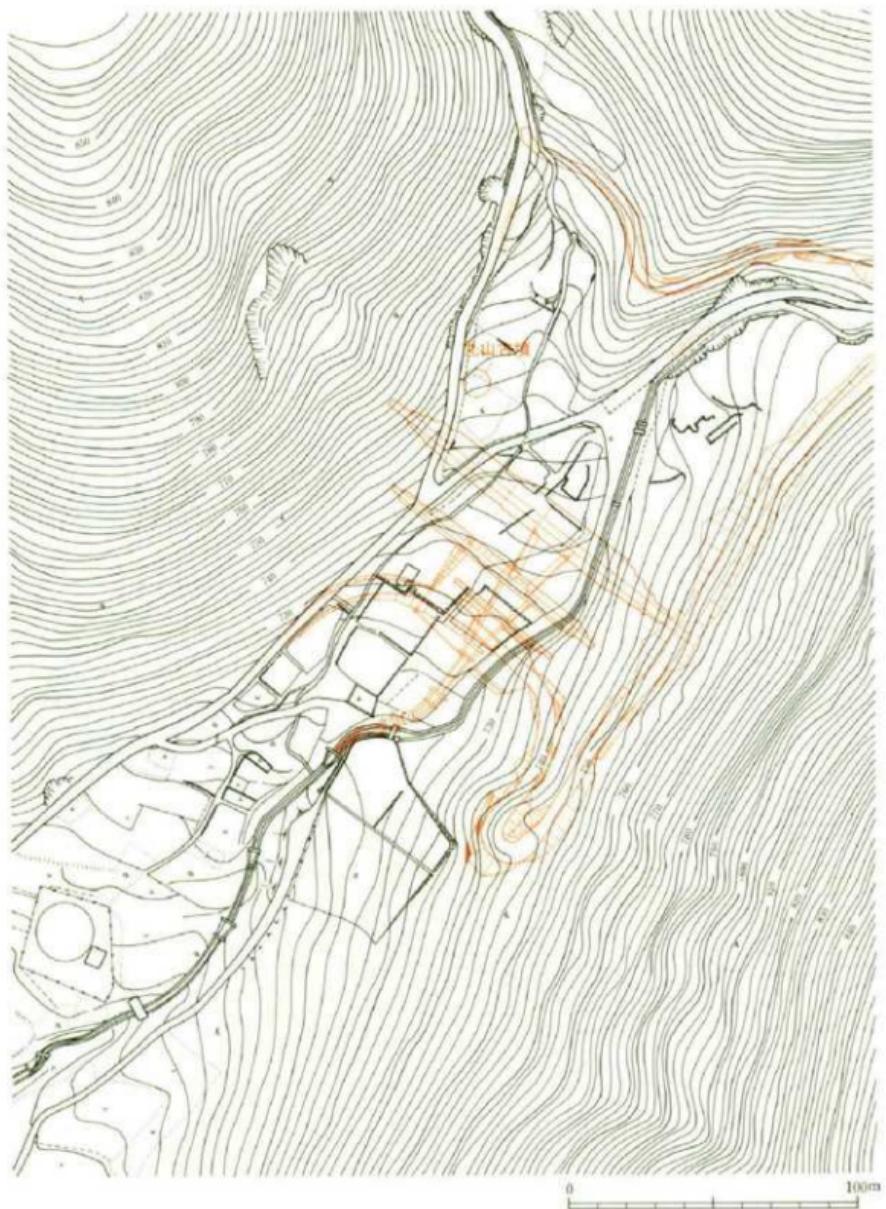
ベンガラは骨表面の一部や横折された断面に見られる。

#### まとめ

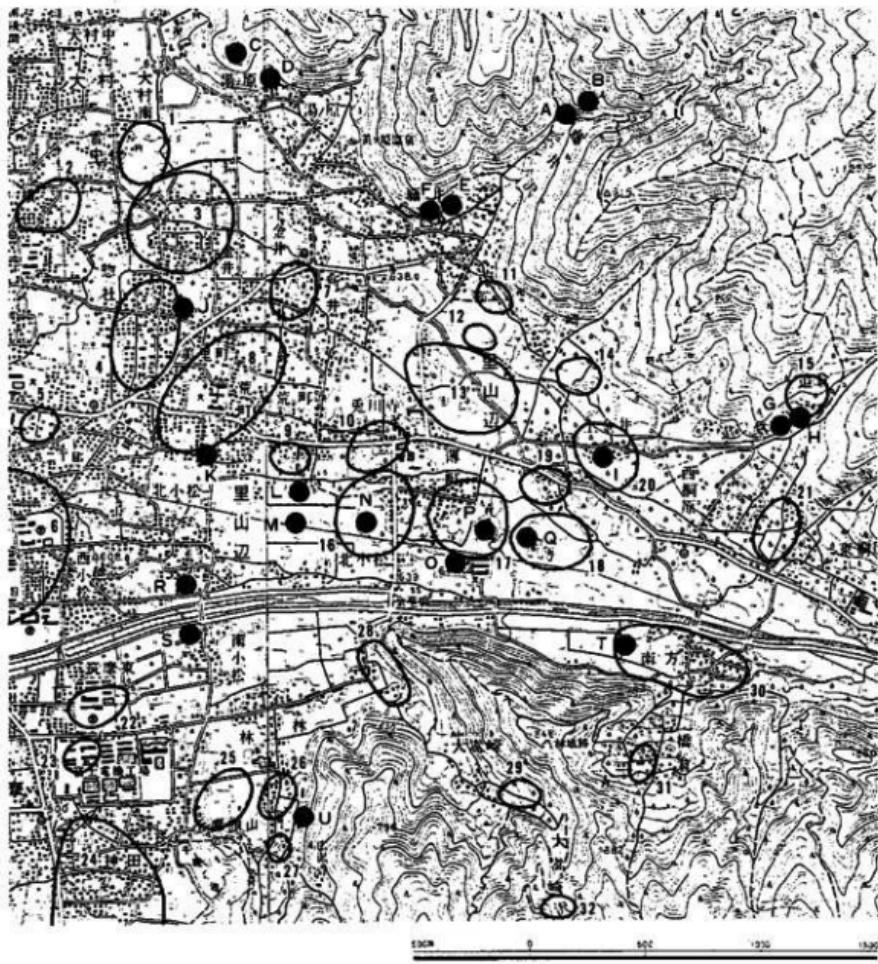
本人骨は生骨と火焼骨の各1個体の混在と考えられる。生骨で残る遺骸は、頭蓋骨や大腿骨などのわずかな小片であるが、部分的にかなり頑丈な形態を示し、歯の咬耗の進行度から壮年期の男性人骨と推定される。火葬骨の場合、骨の部位により、かなり火熱の程度による相違が生じており、通常の白色化した骨片は見当たらない。これらを1個体とみると、やや弱度で部分的な火力を受けた火葬の結果と見なされる。性別・年齢などは不明であるが、寛骨の一部その他の部位でやや男性的な形態を示している。



第1図 遺跡の位置



第2図 調査範囲



●古墳

- A. 丸山 (6号)
- B. 山田入 (7号)
- C. 御母家2号
- D. 御母家1号 (5号)
- E. 藤井1号 (8号)
- F. 藤井2号 (15号)
- G. 人穴1号 (13号)
- H. 人穴2号 (14号)
- I. 上金井 (12号)
- J. 車塚
- K. 荒町 (1号)

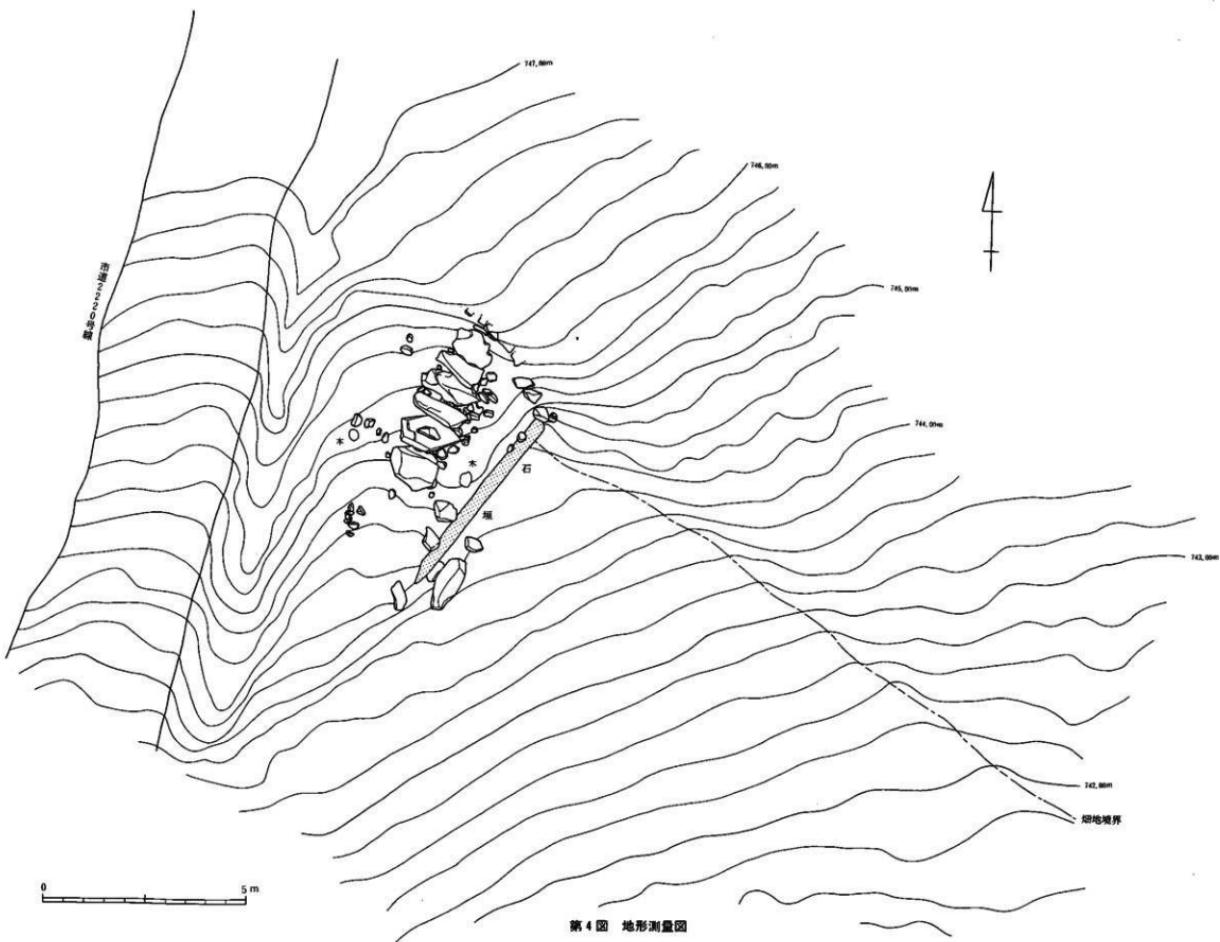
(号) : 「里山辺 号古墳」の略

- L. 大塚2号 (3号)
- M. 大塚1号 (2号)
- N. 針塚 (4号)
- O. 猫塚 (17号)
- P. 古宮 (16号)
- Q. —
- R. 北河原屋敷 (11号)
- S. 巾上 (10号)
- T. 南方
- U. 御符 (9号)

●遺跡

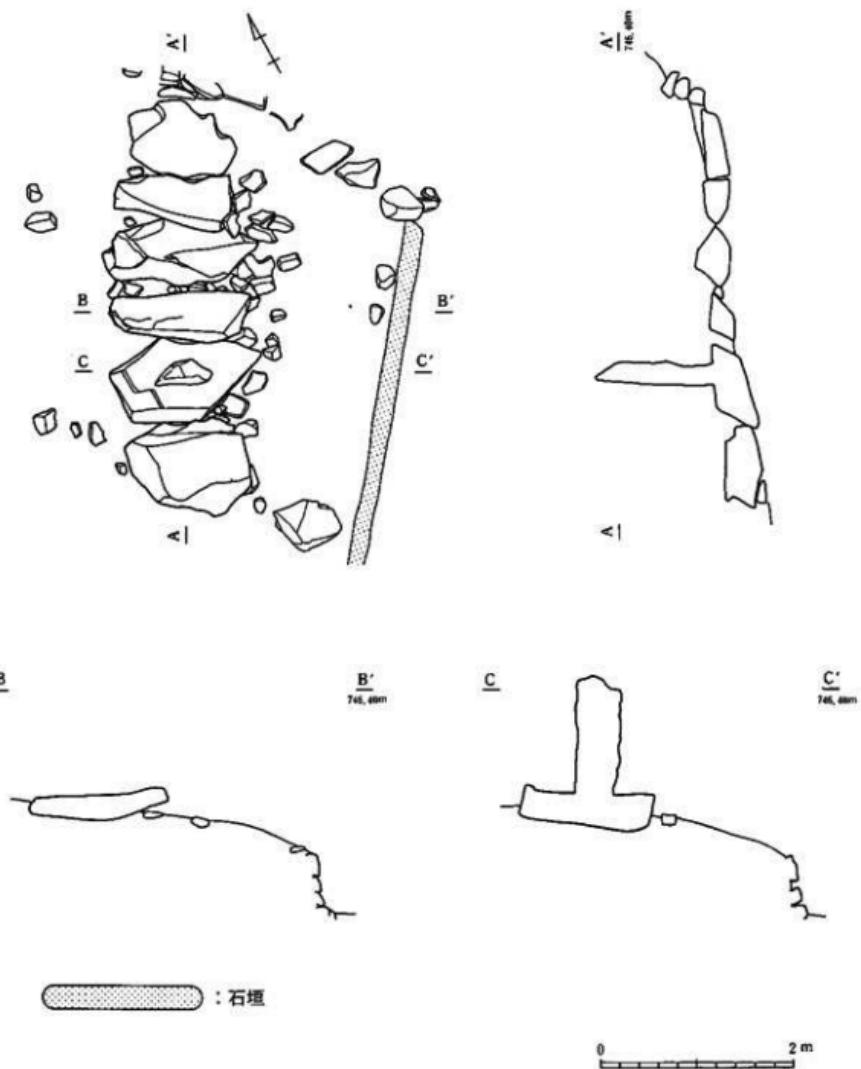
- 1. 塚田
- 2. 横田
- 3. 惣社北
- 4. 宮北
- 5. 四ツ谷
- 6. 県町
- 7. 新井
- 8. 下原
- 9. 荒町
- 10. 児川寺
- 11. 山田
- 12. 藤井
- 13. 箬の内
- 14. 矢崎
- 15. 追倉
- 16. 針塚
- 17. 薄町
- 18. 石上
- 19. 鎌田
- 20. 上金井
- 21. 東桐原
- 22. 松本工業高校
- 23. 富士電機
- 24. 神田
- 25. 千鹿頭北
- 26. 御符
- 27. 林
- 28. 林山腰
- 29. 大嵩崎
- 30. 南方
- 31. 桑倉
- 32. わび沢

第3図 周辺遺跡

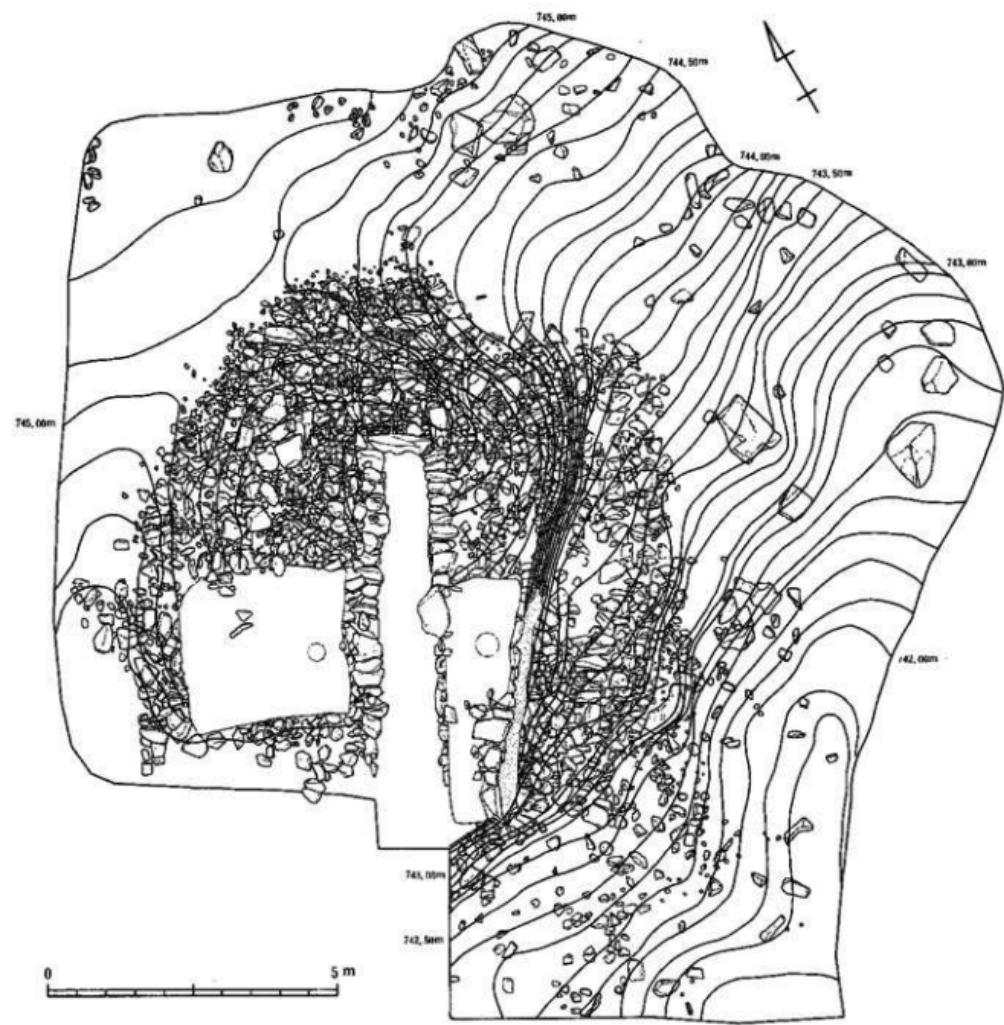


第4図 地形測量図





第5図 天井石測量図



第6図 調査区全体図

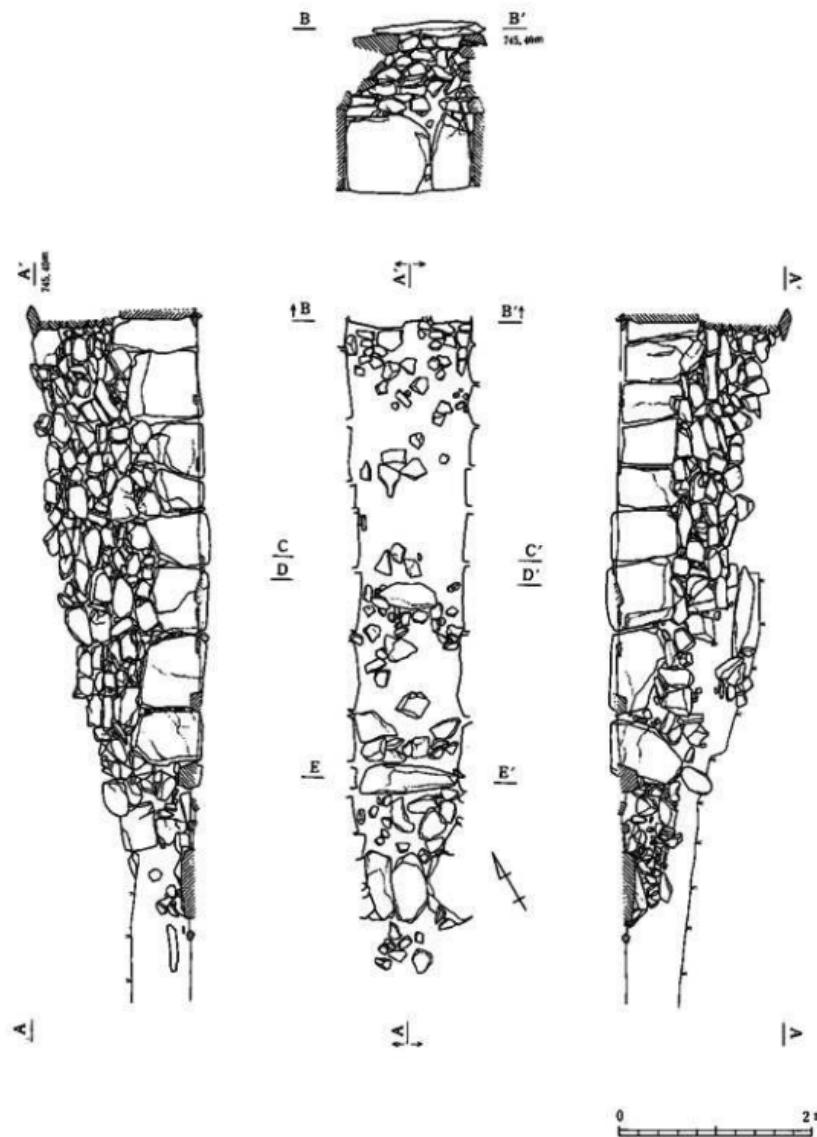


第7図 墓丘測量図

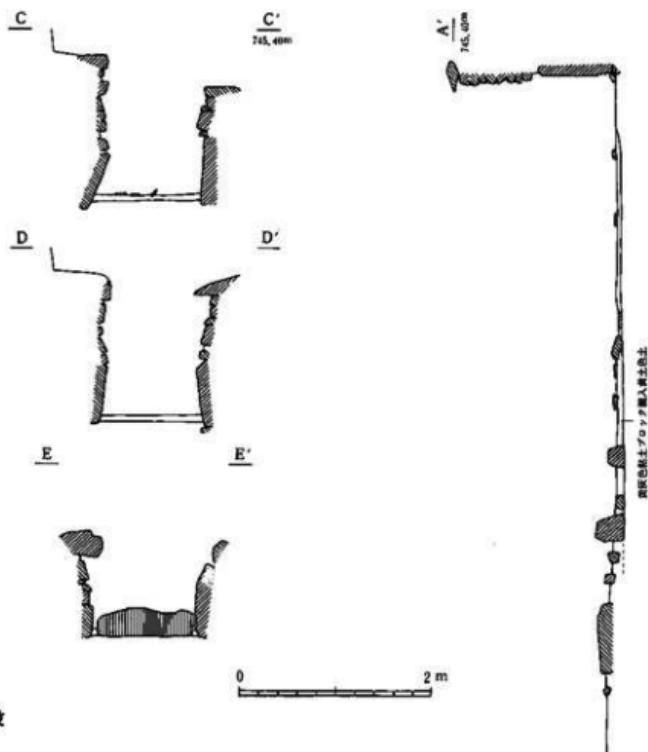




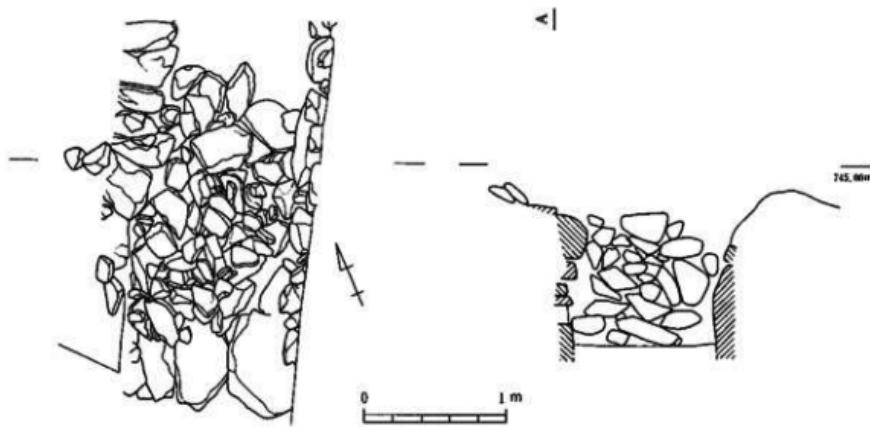
第8図 墓丘断面図



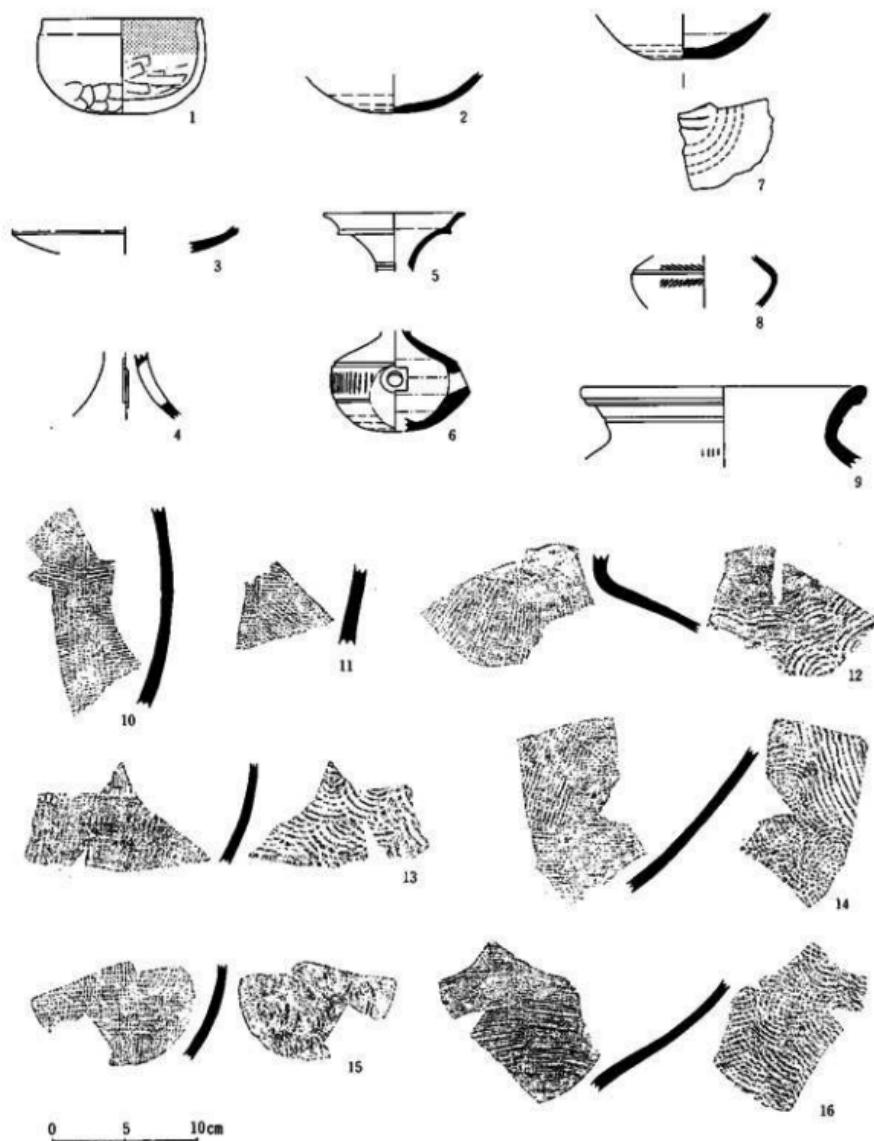
第9図 横穴式石室測量図(1)



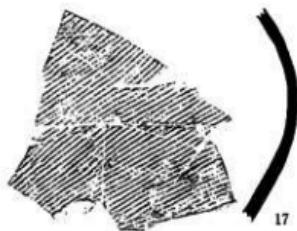
閉塞施設



第10図 横穴式石室測量図(2)



第11図 土器(1)



17



18

二木直人氏所藏資料



27



28



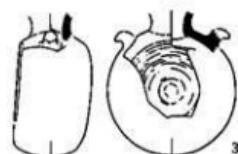
29



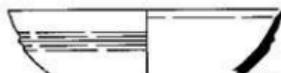
30



31



35



32



33



36



34



37-1



37-2



37-3

0      5      10cm

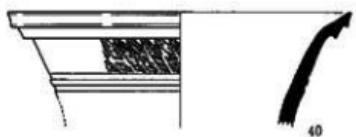
第12図 土器(2)



38



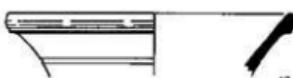
39



40



41



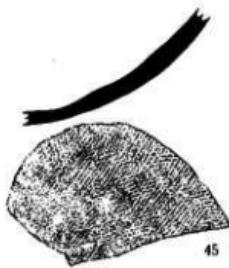
42



43



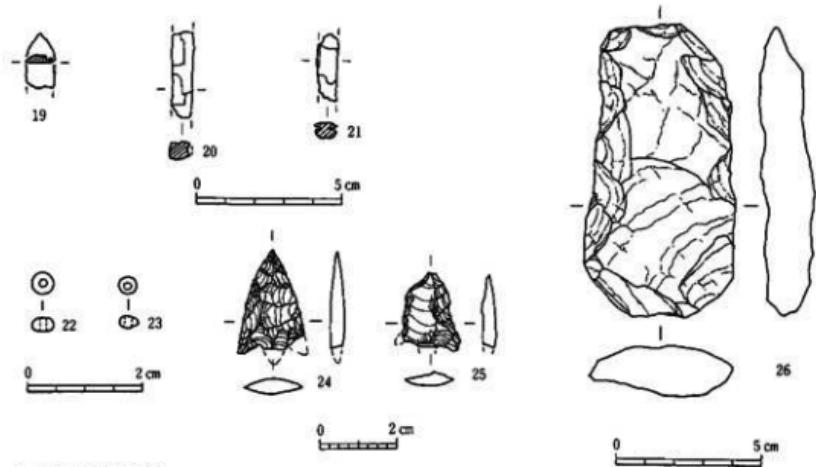
44



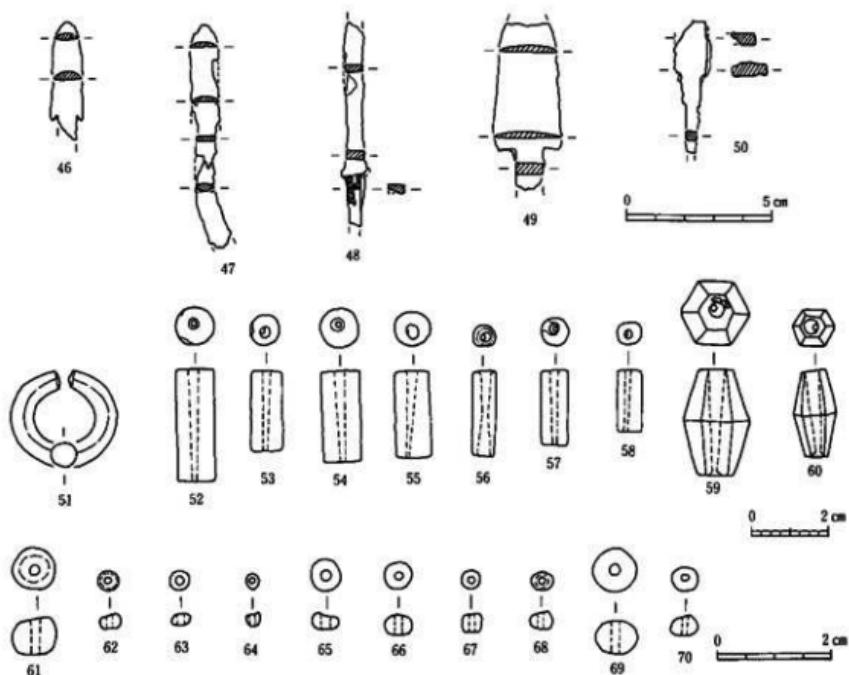
45

0 5 10 cm

第13図 土器(3)



二木直人氏所蔵資料



第14図 鉄製品・装身具・その他の遺物

# 写 真 図 版



横穴式石室



墳丘



左同（調査前）



左同（古墳は砂防ダムの右端付近に位置する）



左同（調査前）



古墳の立地（左側は建設中の砂防ダム）



天井石：北から（白い部分は砂防ダムの堰堤）



天井石東側の石垣（手前側が旧耕作地）



天井石：南から（「丸山大神」の碑）



天井石露出状況



天井石北側の石垣（下端部を境に土色が変っている）



トレンチ詰張状況（埴丘壁はトレンチ外へ伸びる）



天井石北側の石垣・最奥部の天井石



石室内の土・礫堆積状況



骨蔵器埋納施設（蓋石露出状況）



左同（蓋石除去後）



骨蔵器埋納施設（出土状況）

大形碟で四角に囲んだ中に骨蔵器と酒器がみえる。  
石囲いの外側には小碟が充填されている。



左同（台石出土状況）

骨蔵器と酒器 2 個は中央の大形碟の上に安置されていた。

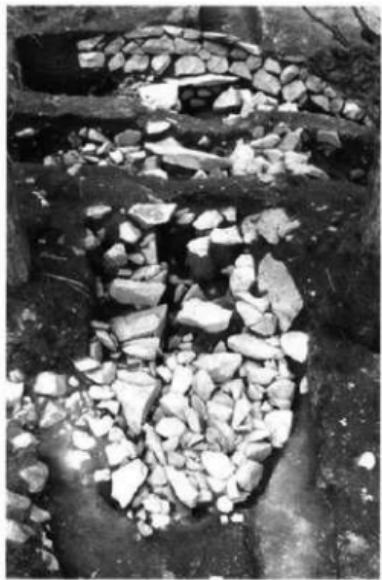


骨蔵器と酒器



左 同

骨蔵器の蓋の裏側には「大正十年五月三日改葬」の墨書がある。容器内には生骨・焼骨が混入していた。



閉塞施設 (1)



閉塞施設と石室内に投棄された砾



▲閉塞施設 (3)

◀閉塞施設 (2)



左同（奥壁側から）



横穴式石室全景



横穴式石室（羨道部入口付近から）



横穴式石室（左側壁）



埴丘：東側（石垣下部の埴丘残存状況）



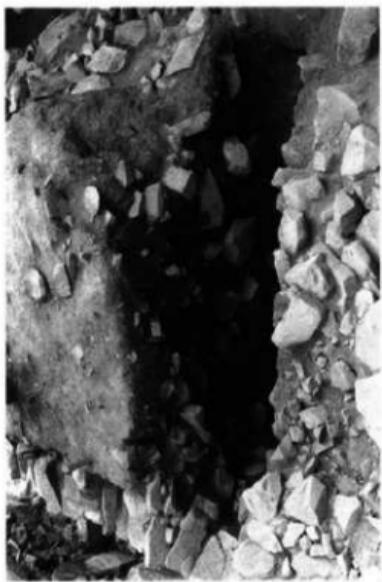
左同（埴丘は土石混合）



埴端部の状況（石室入口の西側付近）



埴丘北側トレンチ（西壁）



左同（南壁）



左同（南壁）



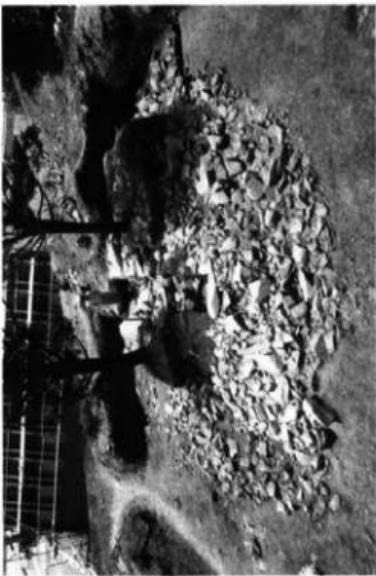
墳丘西側トレンチ



墳丘東側トレンチ



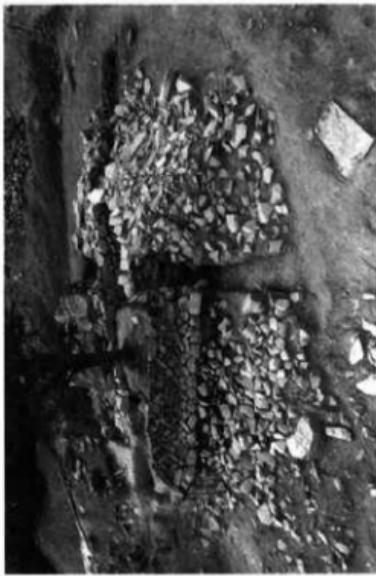
墳丘（北から）



墳丘（西から）



墳丘（南から）



墳丘（東から）



左記之物件東京帝室博物館、御寄贈相成御厚意  
致深謝候承、保存本館ノ資料可供候也

大正十一年十二月廿七日

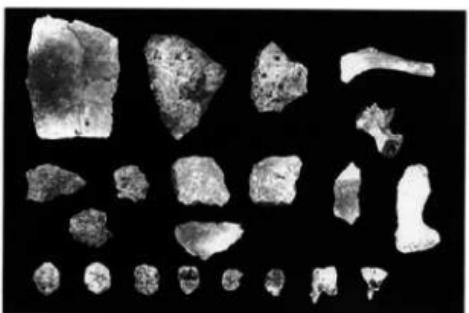
二木誅藏殿

一平瓶殘缺陶製壺體以下皆拾七點  
列試同錄之通

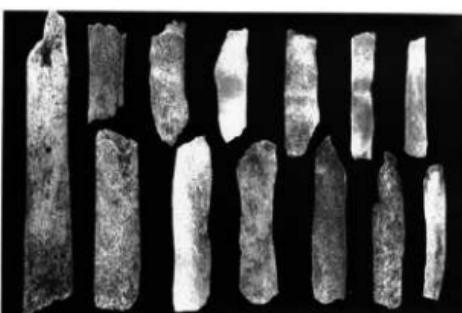
(左上) 大正11(1922)年12月27日付で東京帝室博物館から二木諫藏氏へ贈られた感謝状。

(右上) 感謝状に記載されている「別紙目録」。2枚  
(中) の和紙に寄贈された出土品が種類別に記さ  
れている。

(下) 大正10(1921)年5月3日に二木諫藏氏によって改葬された骨蔵器内の人骨・歯。鑑定の結果、各1体分の生骨と火焼骨と推定される。



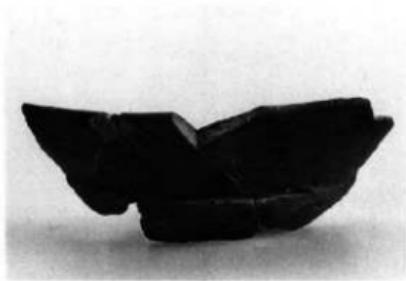
頭蓋骨・歯・椎骨・鎖骨・寛骨など



### 大腿骨・脛骨など



杯（1）



杯（29）



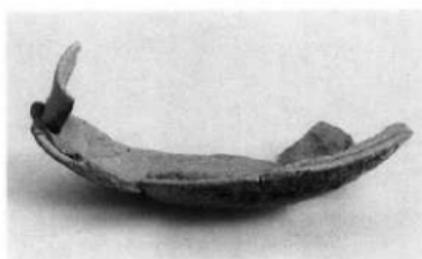
杯（27）：外面（左）、内面（右）



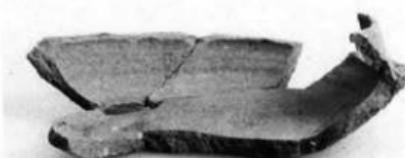
杯（2）：底部



瓶類？の底部ヘラ記号（7）



杯（30）：外面（左）、内面（右）





高杯（32）



高杯（4）



長脚 2段高杯（34）



短頸壺（8）



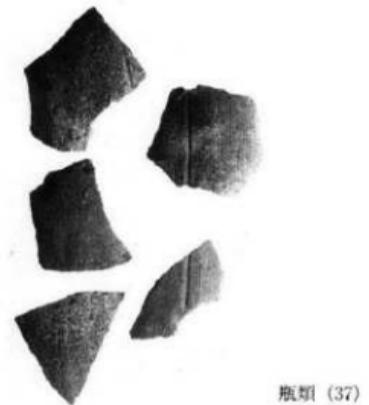
壺（6）：正面



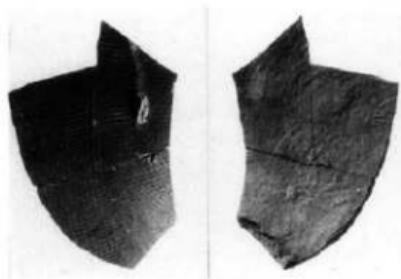
壺（6）：側面



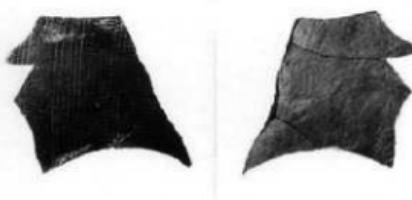
提瓶 左：口頭～体部（35）  
右：体部



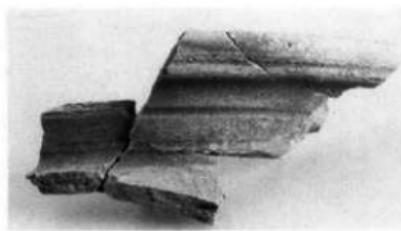
瓶類（37）



横瓶 (38)



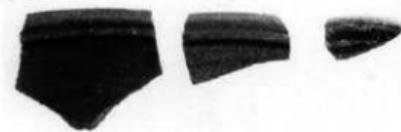
横瓶 (39)



壺 (9)



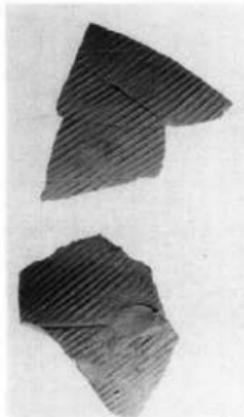
壺 (40)



壺



壺 (41・42)、瓶類 (36)

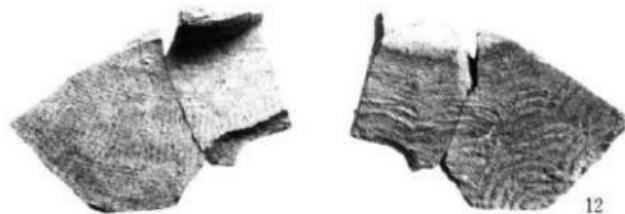


壺 (上は右の破片と接合する)



壺 (17)

塊



12



13



14



45



16



44

ガラス製小玉 (23、22)



鉄鏃 (19~21)



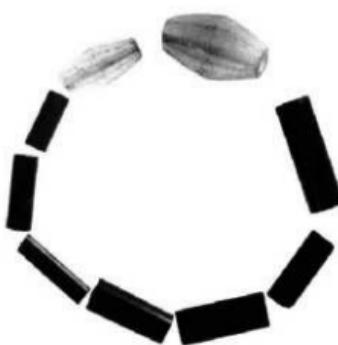
打製石斧 (26)、石鏃  
(25)



耳環 (51)



ガラス製・滑石製小玉 (61~70)



管玉 (52~58)、切子玉 (59、60)



鉄鏃 (46~50)

---

---

松本市文化財調査報告 No.104

## 松本市里山辺丸山古墳

平成5年3月22日 印刷

平成5年3月22日 発行

編集 松本市教育委員会  
〒390 長野県松本市丸の内3-7  
TEL0263(34)3000

発行 松本市教育委員会

印刷 藤原印刷株式会社

---

---